

年報

第26号
(令和4年度)

教化推進レポート

- 1.「教化を考える会」ならびに
「他宗派・他団体交流会」開催報告
- 2.臨床宗教師の現状と課題
- 3.ウィズコロナ時代の教化活動
—ハイブリッド対応による教化—
- 4.真言宗智山派における青少年教化活動

智山教化センター

I 緒言	1
II 令和4年度教化目標の推進	4
A. 研修・講習会の開催	4
B. 教区等の活動について	11
C. 各種講習会等の出講について	12
D. 出版物と教化推進	14
III 教化推進レポート	18
①「教化を考える会」ならびに 「他宗派・他団体との交流会」開催報告	18
②臨床宗教師の現状と課題	23
③ウィズコロナ時代の教化活動—ハイブリッド対応による教化—	28
④真言宗智山派における青少幼年教化活動	33
IV その他	40
・購入図書　宗内寺院・教会刊行物　寄贈図書・資料	40
・智山教化センターの役割と活動／智山教化センター構成員	裏表紙

I 緒言

智山教化センター センター長 鈴木芳謙

令和4年度も新型コロナウイルス感染症の影響を受け、さまざまな活動の自粛や制限が求められる1年でした。しかし、令和5年3月13日からマスクの着用は個人の判断が基本となり、続いて5月8日には感染症法上の位置づけが季節性インフルエンザと同じ類型に移行されます。このように徐々に制限などが緩和され、新型コロナウイルス感染症の流行も収まりつつあり、少しずつ明るい兆しが見え始めてきた印象を受けます。

一方で、新型コロナウイルス感染症の流行に起因する社会情勢の変容は、加速度を増しながら私たちの慣習や、日本の習俗に影響を及ぼしているように感じます。さらにはロシアのウクライナ侵攻による物価高騰や、近年不安視されてきた少子化・人口減少問題などの事象が顕在化し始めています。

このような急激な社会情勢の変化に直面すると、私たちはつい俯きがちになってしまいます。しかし、よく考えてみれば、社会というものは時として大きな転換を伴いながら、常に変化し続けるものです。将来を見据えて、現時点で個々の寺院・住職の置かれた立場から社会環境にどのように対応するかが、これまで以上に重要になってくることでしょう。

近年の社会の変化とこれからの展望を踏まえ、本号の教化推進レポートでは、次の4つの報告を智山教化センター所員と専門員が執筆しています。

①智山教化センター内の勉強会「教化を考える会」、「他宗派・他団体との交流会」について（平野隆光所員）

- ②実際に臨床宗教師として現場に携わった経験からの臨床宗教師の現状と課題、その可能性について（高橋一晃専門員）
- ③コロナ禍で試みられた教化活動の総括と、コロナ禍以降のいわゆるウイズコロナ時代の教化活動について（川又俊則専門員）
- ④推奨する教化活動の1つ「青少幼年教化」の変遷、寺子屋を中心とした、これまでの歩みと取り組みについて（池田裕憲所員）
以上の教化推進レポートについて、智山教化センターの活動記録と合わせてご高覧いただきますようお願い申し上げます。

生きる力 / さまざまな転換期

令和5年は、宗祖弘法大師ご誕生1250年の正当年です。今を遡ること50年ほど前の宗祖弘法大師ご誕生1200年を迎える頃に、本宗において、現在の教化目標として周知される「生きる力」という標語が誕生しました。この標語が誕生した背景には、当時、宗団としての教化理念の必要が叫ばれたことと、新宗教の台頭が意識されたことがあります。そして「生きる力」の標語は、当時の教化運動「つくしあい運動」の中で用いられました。

当時勢いを増していた新宗教の教線拡大は伝統教団にとって脅威であり、現実的な対応が急務であったことは間違ひありません。

また、時を同じくして、本宗の第1回目の総合調査が行われました。宗内外の現況を知り、社会環境にどう対応するかという問題意識から、本宗の総合調査は開始され、

I

緒
言

以来、原則的に5年ごとに実施しています。この総合調査の結果も踏まえながら、令和3年度から令和6年度までの教化推進施策が検討され、教化目標「生きる力—仏さまに祈り、仏さまと出会う」も定められています。

総合調査が始まってから、およそ50年という年月を振り返ると、いくつかの注目すべき変化が確認できます。『令和3年度実施総合調査分析研究報告書』についてみると、その寺院票では、平成22年度実施総合調査で、初めて「檀家が減少した」が、「檀家が増加した」を上回り、以降2回の調査（平成27年度実施・令和3年度実施）とも、逆転することではなく、その差はますます広がっています。また、離檀理由も「後継者が絶えたため」が一番多く、いよいよ人口減少のフェーズに入ってきたことを肌身で感じるような調査結果で、大きな社会の転換期を迎えることが示されたようにも思います。（詳細は『令和3年度実施真言宗智山派総合調査分析研究報告書』（26頁）をご参照ください。）

現代の葬儀／説明と参加

社会の転換期を迎えることのあるならば、その要因を身近なところから確認し、見直していくことが必要でしょう。そのような観点から企画し、コロナ禍で3年ぶりに開催された「教区教化研究会・檀信徒教化推進会議運営セミナー」では「社会の転換期における葬送儀礼の現状と課題」をテーマに掲げ、株式会社寺院デザイン代表の薄井秀夫氏に基調講演をいただきました。

薄井氏は、寺院・僧侶方に自信を持って葬儀を執り行って欲しいと願い、「葬式仏教価値向上委員会」を立ち上げており、近年、一般の方々を対象としたコロナ禍での仏事に関する意識調査を独自に実施されました。講演では、その意識調査の結果から、

檀信徒を始めとする一般の人々が抱いている葬儀や寺院・僧侶への見方について触れられ、葬儀に関して次のように指摘されました。

まず、以前の葬儀形態である葬列主体の葬儀（野辺送り）は、自宅でお経→葬列を組みお寺へ→本堂でお経→墓地で土葬と、「死者を送る」ということが実感できるプログラムであり、ドラマティックなものであった。そこでは僧侶、遺族、参列者の全員が主役となる葬儀であり、遺族も参列者も、自分たちが「死者を送っている」という実感を持つことができた。また、葬儀式の次第も、「死者を送っている」ということを語っていた。

しかし、主に葬儀ホールが会場となった現代の葬儀に対して、一般の人々は以下のようないい象を抱くようになっている。

- 遺族や参列者にとって、ただ、お坊さんがお経を読んでくれるのを見ているだけで、正直いって、退屈。
- 遺族も参列者も傍観者になってしまふ。お坊さんが何をやっているかも、ほとんどわからない。
- 故人をあの世に送る儀式だということが実感できない。何のために葬儀をやってるか、わからなくなる。

薄井氏は、遺族・参列者がこのような思いを抱いてしまうことに対して、決定的に足りないのは「説明と参加」であると指摘しています。社会の転換期においては、この「説明と参加」というポイントは重みを増していくことでしょう。

「生者が死者を思いやり、死者が生者を思いやる信仰は、日本人が決して忘れてはならない、美しくて優しい信仰。そんなささやかな祈りを育んであげることこそ、とても大切なこと。佛教界は、もっと葬式仏教のすばらしさを説くべき」と語られた講師の言葉の意味を味わいつつ、そのご提言に

真摯に向き合いたいものです。

と考えます。

より体験的な教化の実践 / 洒水加持

令和3年度からの教化推進では、お大師さまの説く三密加持を実践理念とし、より体験的な教化活動の実践を提案してきました。具体的には、「推奨する教化活動」や各法要等において「洒水加持とお授け」と「金剛合掌」を組み入れ、実践行として檀信徒に「加持」を体験していただくことなどを推奨しています。檀信徒の教化活動への参加や体験は、これから教化という視点からもキーワードになってくるはずです。

智山教化センターでは、各教区に1名以上の「教化モニター」を委嘱し、アンケートをとおして意見を収集し、教化推進を開する上での一資料としています。ここでは、より体験的な教化活動の実践のひとつ「洒水加持」について、教化モニターアンケートから収集したデータの一端をお示したいと思います。

まず檀信徒に「Q: 洒水加持を行っているか?」(回答数44)では、およそ半数の回答者が行っているという結果でした。また「Q: 檀信徒に向けての洒水加持は、檀信徒教化に効果的だと思うか?」では、66%の回答者から肯定する意見が得られました。

個別の意見としては、「洒水加持を受けた檀信徒は、態度や気持ちに変化が起り、こちら側の話をよく聞いてくれる。洒水加持は教化活動に有効」「手を合わせ、お加持を受けるだけで、参加者の意識が参加型のお勤めになる」「宗教儀礼の直接的体験を通じて祈りへの意識を高める事に繋がる」「真言宗の特徴」「儀式に参加している感覚を味わえる」という肯定的な意見が多く寄せられました。引き続き、真言宗の教義や作法に基づく実践を逸脱することなく、より効果的な体験的教化活動を推奨していきたい

宗教は、人を幸せに導くことが根本のひとつにあるはずですが、昨今では新宗教教団における宗教二世の問題等が表面化したことなどにより、日本人の「宗教」に対する不信感は一層増しているように感じます。また、そのような意識は既成仏教教団へも波及し、影響を与えているように思います。

他方、近年では「幸福学」や「ウェルビング」という領域から人の幸せを考察していくこうという試みが注目されています。日本では、戦後の混乱期を経て、経済成長期には「モノの保有=幸せ」という図式が成り立っていました。しかし、現代の成熟した社会においては、むしろ断捨離ブームに象徴されるように、ミニマルに生きることが幸せであるということに価値観が変化しました。また、マインドフルネスや瞑想等への関心の高まりからも、どう生きるかを模索している人々の存在や潮流をうかがうことができます。

これまでの社会においては、私たちが何をするか (doing) が問われてきたのかもしれません、同時にどう在るか (being) という意識が重要視されるようになってきているように思います。そのような人々の意識の変化からも、教化活動における参加や体験 (doing) をとおして、生きることの意味や、自己の在り方 (being) を模索することの意義は大きくなるはずです。個々の在り方 (being) を見つけられる場所や役目を、寺院や住職・教師が担うことができるならば、それこそが檀信徒の信仰心の涵養や、安心の体得に繋がる道となるのではないでしょうか。

令和4年度教化目標の推進 生きる力 —仏さまに祈り、仏さまと出会う

A. 研修・講習会の開催

1

教師・寺族向けの研修会

智山総合研修会

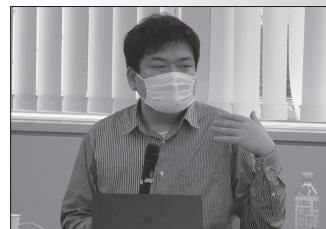
本宗教師・寺庭婦人のさまざまな研鑽意欲に応えるために宗務庁が主催する分科会形式の研修会。智山教化センターでは分科会（第5分科会）の企画・運営を担当した。

日 時：令和4年6月1日（水）～6月2日（木）
会 場：別院真福寺

第5分科会「寄り添いが導く新たなウェルビーイングの形」

人間がコミュニケーションロボットを作る理由の一つに「誰かに寄り添われている感覚」を得たいという欲求がある。現在のロボットは、人間の問題を代わりに解く「人工知能：AI」として寄り添いの感覚を提供しているが、高橋氏は自ら問題を解こうとする人間の力を引き出し、支える力を「人工あい：A愛」と称し、人工あいを備えるロボットを研究している。講師はこのような寄り添いの感覚を古来より提供してきたのは宗教であり、その理想形のひとつが道端のお地蔵さまであると語る。本分科会は氏の研究成果をもとに、我々が提供できる寄り添いについて考える企画とした。

講 師：高橋英之 氏
(大阪大学大学院基礎工学科特任准教授)
司 会：島 玄隆 智山教化センター所員
記 録：中嶋亮順 智山教化センター所員



— 高橋英之 氏 —



— 質疑応答 —

報告：『宗報』863号（令和4年8月号）掲載

令和4年度寺子屋交流会（寺子屋勉強会）

従来の青少年教化に関する研修会は、これから寺子屋を始めようとしている方へ向けた「寺子屋開設講座」と、すでに寺子屋を実践している方を対象とした「寺子屋交流会」が隔年で行われていた。

しかし、近年寺子屋実施率が一定の割合に達したことで、未開催者と実践者の交流の場を提供したいという思いを背景として、令和4年度は開設講座と交流会の内容を組み合わせ、企画から開催、そして更なる充実を目指し、寺子屋活動に関する情報を総合的に網羅した「寺子屋勉強会」と名称を改め開催された。

日 時：令和4年6月29日（水）
会 場：別院真福寺・オンライン
内 容：寺子屋開催事例報告（2ヶ寺）

講 師：
師：三富良正 師（新潟第一教区 南泉院中）
海老塚和秀 師（高知教区 竹林寺住職）
高岡邦祐 教化センター専門員
佐藤順與 師（埼玉第二教区 閻魔寺住職）
佐藤英順 師（埼玉第十一教区 長榮寺住職）
中嶋亮順 智山教化センター所員
倉松隆嗣 智山教化センター所員
池田裕憲 智山教化センター所員
参 加 者：15名（会場7名 オンライン8名）

報告：『宗報』864号（令和4年9月号）掲載



中嶋亮順 所員
—ワークショップ①「地獄からの脱出」—



佐藤英順 師
—ワークショップ②「ちぎり絵大師1250」
の説明 —



—ちぎり絵大師1250—



倉松隆嗣 所員
—講義「安全対策、企画・広報について」—



—全体会—

教化活動実践セミナー

教化活動の具体的な場面を想定し、その状況にあわせた実践研修を行い体験的に学ぶことにより、各教化活動についての具体的な理解と体得を促進し、教化活動者の育成を目指している。令和4年度の実践セミナーは、「写経会」を取りあげた。

日 時：令和5年2月16日（木）
 会 場：別院真福寺・オンライン
 テーマ：『写経会』の可能性～開催から発展まで～
 内容・講師：事例紹介「写経会を開催するまで」

　　徳永隆弘 師（長野北部教区 萬福寺住職）
 解説「写経会を実施するために
 ～写経会の実際、推奨する作法を踏まえて～」
 石川照貴 師（智山講伝所非常勤所員・智山教化センター専門員）

参 加 者：20名（対面9名、オンライン7名、教師講習所教化応用科受講生4名）

報告：『宗報』872号（令和5年5月号）掲載



— 德永隆弘 師 —



— 石川照貴 師 —

2

教師・寺族と檀信徒がともに参加できる研修会

愛宕薬師フォーラム

教師・寺族・檀信徒・一般の方々の知的好奇心に応えるため、仏教、さらには現代社会が抱える問題や社会現象などのさまざまなテーマで講演会を開催している。令和4年度は2回開催した。

毎回、別院真福寺を会場に各界の専門家による講演が行われ、参加者のより深い理解を促すべく、講演後には質疑応答の時間を設けている。

■第41回 令和4年12月13日（火）

テマ：「智積院障壁画の世界－桃山の息吹に触れる－」
 会場：別院真福寺・オンライン
 講師：安原成美 氏（日本画家）
 司会：倉松隆嗣 智山教化センター所員
 参加者：46名（対面31名、オンライン15名）

報告：『宗報』870号（令和5年3月号）掲載



— 安原成美 氏 —

■第42回 令和5年2月27日（月）

テマ：「世界の宗教とお大師さまの十住心思想」
 会場：別院真福寺・オンライン
 講師：吉田宏哲 師（大正大学名誉教授）
 司会：中嶋亮順 智山教化センター所員
 参加者：82名（対面54名、オンライン28名）

報告：『宗報』873号（令和5年6月号）掲載



— 吉田宏哲 師 —

檀信徒向けの研修会

檀信徒研修会（教化部企画運営協力）

全国の檀信徒が、信仰を深め、日々安らぎに満ちた生活を送っていただくことを目的として総本山智積院に集い、さまざまな宗教体験（写経、御詠歌、阿字観、檀信徒法要など）を実修するためを開催している。

宗祖弘法大師ご誕生1250年の慶祝に向けて、さまざまなプログラムをとおして、お大師さまの生涯や教えについて学ぶ企画とした。

日 時：令和4年11月16日（水）～17日（木）

会 場：総本山智積院

テ マ：「お大師さまご誕生1250年に向けて
～お大師さまのご誕生とみ教えを学び、真言宗の修行を体験する～」

参 加 者：20名

内容・講師：法話① 「真言宗の教え、お勤め」

石川照貴 師（智山講伝所非常勤所員・智山教化センター専門員）

修行体験① 「写経」

平野隆光 智山教化センター所員

修行体験② 「阿字観」

伊藤尚徳 智山教化センター所員

修行体験③ 「オリジナル御朱印帳作り」

池田裕憲 智山教化センター所員

法話② 「お大師さまのご生涯と教え」

倉松隆嗣 智山教化センター所員

修行体験④ 「諸堂巡礼」

1班 毛利芳己 教師講習所専門科生	倉松隆嗣 智山教化センター所員
-------------------	-----------------

2班 内田龍雅 教師講習所専門科生	萩原輝浩 智山教化センター主事
-------------------	-----------------

3班 斎藤雅恵 教師講習所専門科生	中嶋亮順 智山教化センター所員
-------------------	-----------------

4班 中島隆光 教師講習所専門科生	池田裕憲 智山教化センター所員
-------------------	-----------------

5班 久志卓豊 教師講習所専門科生	平野隆光 智山教化センター所員
-------------------	-----------------

6班 山田健真 教師講習所専門科生	鈴木芳謙 智山教化センター長
-------------------	----------------

法要 「檀信徒法要」

報告：『宗報』868号（令和5年1月号）掲載

4

教区教化研究会・檀信徒教化推進会議の開催推進のために

教区教化研究会・檀信徒教化推進会議 運営セミナー

運営セミナーは、各教区の教区長や研修会企画担当者を対象に、開催意義や開催・運営手法を学ぶためのセミナーとして開催している。

社会情勢やコロナ禍の影響を受けて変化しつつある葬儀の様相と、将来の展望について、株式会社寺院デザイン代表取締役 薄井秀夫氏にご講演いただいた。講演後には、コロナ禍の現状を踏まえ、今後寺院に求められているものは何かを分散会で話し合い、教区教化研究会、檀信徒教化推進会議を企画する際のヒントを探る機会とした。

II

令和4年度教化目標の推進

日 時：令和5年3月17日（金）
 会 場：別院真福寺
 テーマ：「社会情勢の変容を受けての研修会を考える」
 対 象：教区長
 参 加 者：58教区60名
 内容・講師：「教区教化研究会・檀信徒教化推進会議ガイダンス」

小鍋寛仁 教宣課長

「教区教化研究会における単位制度について」

金子隆昭 教育課長

「令和5年度の本宗の教化推進について」

鈴木芳謙 智山教化センター長

講演「社会の転換期における葬送儀礼の現状と課題、寺院に求められること」

薄井秀夫 氏（株式会社寺院デザイン代表取締役）



— 薄井秀夫 氏 —

報告：『宗報』873号（令和5年6月号）掲載

5

その他（企画・運営協力）

別院真福寺阿字観会

別院真福寺で、一般の方々を対象に開催している阿字観会の開催・指導に協力した。
 ※新型コロナウイルス感染症の感染拡大にともない、15時からの「昼の部」のみ、定員を減らして開催した。

令和4年

開催日	指導担当	参加人数
4月26日(火)	金剛洋輝 センター所員	11名
5月24日(火)	中嶋亮順 センター所員	11名
6月28日(火)	島 玄隆 センター所員	12名
9月27日(火)	伊藤尚徳 センター所員	12名
10月25日(火)	池田裕憲 センター所員	13名
11月22日(火)	平野隆光 センター所員	13名

令和5年

開催日	指導担当	参加人数
2月28日(火)	倉松隆嗣 センター所員	20名
3月28日(火)	上村正健 センター所員	24名

第61回中央布教師会総会

中央布教師会は、各教区の布教師会会长が集い、年1回総会を開催している。令和4年度は以下の内容で開催され、その企画・運営に協力した。

- 日 時：令和4年4月15日（金）
 会 場：別院真福寺
 テ ー マ：「ご宝号から始まる、仏さまへの祈り」
 解 説：「生きる力 一仏さまに祈り、仏さまと出会うー」
 鈴木芳謙 智山教化センター長
 「宗祖弘法大師ご誕生1250年正当年に向けて」
 海老塚和秀 師（中央布教師会会长）
 「ご宝号から始まる、仏さまへの祈り」
 伊藤尚徳 智山教化センター所員
 事例紹介：「金剛合掌とご宝号から始まる、仏さまへの祈り」
 事例紹介① 窪 博正 師（高知教区 岩本寺住職）
 事例紹介② 斎藤雅恵 師（岩手教区 自性院中）

報告：『宗報』862号（令和4年7月号）掲載

第28回寺庭婦人連合会総会

寺庭婦人連合会は、各教区の寺庭婦人会長が集い、年1回総会を開催している。その企画・運営に協力した。

- 日 時：令和4年5月13日（金）
 会 場：別院真福寺
 テ ー マ：「お大師さまご誕生1250年への理解を深める」
 内容・講師：「宗祖弘法大師ご誕生1250年について」
 倉松隆嗣 智山教化センター所員
 参 加 者：41名

報告：『宗報』863号（令和4年8月号）掲載

伝法院開設講座

智山伝法院は、本宗の研究機関として、教育の一端を担うべく開設講座を開催し、教師・寺庭婦人の学習の場を設けている。智山教化センターでは令和4年度に1講座を智山伝法院と共同企画した。

■寺院活性化論～開かれたお寺をめざし活動を広げよう～

5月開講

寺院・教会が時代や社会環境の変化に柔軟に対応できるよう、教化活動や寺院活動のさらなる可能性について学び、理解を深めた。また、寺院活性の事例紹介や実修を行うことで具体例を知り、受講者が教化活動を実践する上で参考とする機会とした。

報告：『宗報』863号（令和4年8月号）掲載



— 高岡邦祐師 —

寺院活性化論講義概要

回数	月 日	概 要
第1回	5月10日	<p>「自坊の可能性を探る」 講師：高岡邦祐専門員 【グループワーク・講義】</p> <p>前半に受講生の自己紹介の意味も込め二人一組（またはそれ以上のグループ）で自坊紹介を行い、その環境に合わせどのような教化活動が行えるかを話し合った。後半では高岡専門員による事例も交え、実際の教化現場を学んだ。</p>
第2回	6月14日	<p>「寺院活性化の実際－築地本願寺の取り組み－」 講師：築地本願寺副宗務長 東森尚人師 【講義・事例紹介】</p> <p>時代や社会環境の変化に取り残されず、人々のニーズに耳をかたむけ継続して親しまれ求められる寺院となるための活動を事例から学んだ。</p>
第3回	9月6日	<p>「寺院・地域の魅力再発見」 講師：株式会社JTB総合研究所 主席研究員 河野まゆ子氏 【講義】</p> <p>人々が寺院に求めることや寺院であるから持ちうる強みなどを学び、地域資源を活かし地域とともに活性化する方法を学んだ。</p>
第4回	10月11日	<p>「檀信徒に寄り添う寺院－地域の混乱時に安心を－」 講師：小林信雄教化委員／小杉秀文専門員 【講義・事例紹介】</p> <p>東日本大震災から10年が過ぎた今、被災地での檀信徒への寄り添い、また復興への道のりを改めて知り、また、昨今多発している自然災害を鑑み、地域に開けた寺院の活動と防災への結びつきを学んだ。</p>
第5回	1月17日	<p>「寺院の見える化と寺院活性－SNSで自坊の活動を発信しよう－」 講師：吉田住心専門員 【講義・事例紹介】</p> <p>SNSなどを使用した効率的かつ効果的な発信方法を学んだ。</p>
第6回	2月17日	<p>「今求められる寺院の役割」 講師：川又俊則専門員 【講義】</p> <p>仏教、寺院の社会的役割とは何か、今求められているニーズを知り、活動を考えた。</p>
第7回	3月14日	<p>「檀信徒との強い繋がりを持ち続けるために」 講師：奥島正就教化委員 【講義・事例紹介】</p> <p>不安の多い現代、檀信徒と繋がりを保ち続けることで寺院と檀信徒間での信頼関係を築き、安心を獲得する方法をコロナ禍での事例とともに学んだ。</p>

B. 教区等の活動について

令和4年度 教区教化研究会 開催一覧

教 区	日 時	参加人数	講 師	テー マ
長野南部	5月11日	16名	近藤栄祐 師 長野南部教区 法船寺	寺院運営 ～コロナ禍の現状とこれから～
新潟第三	5月23日	22名	伊藤尚徳 センター所員	ご誕生1250周年に向けて ～今後の教化推進の展開と具体的な進め方～
上総第四 (オンライン併用開催)	6月20日	21名	中嶋亮順 センター所員	「教化概論」 - 仏教×生命科学 ヒトと宗教の成り立ち -
安房第一	6月25日	25名	日下敞啓 財務部長 島 玄隆 センター所員	①宗勢一般 弘法大師ご誕生1250年慶讃事業について ②教化 令和4年度教化推進施策について
埼玉第五	6月25日	25名	高岡邦祐 センター専門員 吉田住心 センター専門員	これからの中の教化
京阪	6月27日	20名	服部融亮 教化部長	宗祖弘法大師ご誕生1250年に向けて ～現代における教化のポイント～
埼玉第一	9月7日	19名	元山公寿 伝法院非常勤教授	お大師さまのご生涯について ～空海絵伝を中心に～
新潟第二	10月6日	14名	佐々木大樹 伝法院非常勤講師	理趣経を用いた教化活動
東京北部	10月6日	14名	田村宗英 伝法院常勤教授	弘法大師ご誕生1250年を迎えて - お大師さまとご信仰 -
埼玉第七	10月29日	17名	斎藤雅恵 師 岩手教区 自性院中	実践布教 ～お大師さまについて～
安房第二	10月29日	16名	田中悠文 師 講伝所 常在所員	弘法大師行状絵師伝を読み解き学ぶ弘法大師
下総印旛	11月4日	26名	服部融亮 教化部長	弘法大師お誕生1250年記念事業の概要と現況 及び教化施策について
岩手	11月12日	25名	海老塚和秀 師 高知教区 竹林寺 中央布教師会会长	巡礼・遍路からみた教化の可能性 ～四国遍路における安心について～
安房第三	11月16日	14名	伊藤堯貫 伝法院客員講師	十三仏信仰と追善回向
高知 (オンライン併用開催)	11月22日	28名	伊藤尚徳 センター所員	ご宝号から始まる、仏さまへの祈り
安房第四	11月22日	16名	田村宗英 伝法院常勤教授	弘法大師信仰について
神奈川	11月27日	23名	戸松義晴 師 浄土宗総合研究所副所長	今後の世界における仏教の可能性と課題
埼玉第四	12月14日	18名	芙蓉良英 宗務総長	宗勢一般と宗祖弘法大師ご誕生1250年に係る 宗団の取り組みについて
東京東部	2月13日	約15名	工藤信人 氏 仏教タイムス社編集長	90年代以降の宗教と政治 ～取材体験と現場から～
埼玉第十一	2月15日	15名	倉松隆嗣 センター所員	宗祖弘法大師ご誕生1250年に向けて ～お大師さまの遺徳を檀信徒に伝えていくために～
北陸	3月4日	6名	田村宗英 伝法院常勤教授	弘法大師信仰について②
愛媛	3月16日	約30名	伊藤尚徳 センター所員	般若心経の解説～檀信徒の教化のために～

※「講師」の肩書きは開催当時のもの

令和4年度 檀信徒教化推進会議 開催一覧

教 区	日 時	参加人数	講 師	テ マ
東京多摩	5月28日	81名	鈴木芳謙 センター長	生きる力
東海	6月2日	328名	松平實胤 師 東海教区 寂光院	発心式
安房第一	6月26日	150名	日下啟財務部長 島 玄隆 センター所員	「わたしたちの目標」について
安房第二	6月26日	69名	服部融亮 教化部長	宗祖弘法大師ご誕生1250年奉修事業と教化目標について
福島第二	6月26日	48名	斎藤雅恵 師 岩手教区 自性院中	ご宝号から始まる仏さまへの祈り
新潟第二	7月19日	38名	阿刀隆峰 師 新潟第一 西生寺	生きる力ー仏さまに祈り、仏さまと出会う 「同行二人」お大師さまと共にー
下総匝瑳	10月13日	27名	三神栄法 総務部長	宗祖弘法大師ご誕生1250年について
茨城第一	11月4日	67名	高橋秀裕 師 埼玉第九 真東寺	宗祖弘法大師ご誕生1250年慶讃
宮城	11月9日	120名	長谷川實彰 師 東海教区 大智院	お大師様の目指したもの
岩手	11月13日	99名	海老塚和秀 師 高知教区 竹林寺 中央布教師会会长	宗祖弘法大師の教えを学ぶ
長野北部	11月16日	61名	阿部泰郎 氏 龍谷大学教授 阿部美香 氏 昭和女子大学 非常勤講師	太子二歳・南無仏を唱える「聖徳太子絵解き」
長野南部	12月9日	100名	斎藤雅恵 師 岩手教区 自性院中	決して忘れないこと～大切な人を想う～

※「講師」の肩書きは開催当時のもの

C. 各種講習会等の出講について

令和4年度 青年会講習会 出講一覧

教 区	日 時	講 師	テ マ
埼玉第四	2月26日	吉田住心 センター専門員	寺院におけるSNS・インターネットの活用と伝道

※「講師」の肩書きは開催当時のもの

令和4年度 教区講習会 出講一覧

教 区	日 時	講 師	テ マ
東京東部	6月9日	上村正健 センター所員	檀信徒に寄り添う葬儀 ～嘆徳文の活用を考える～
埼玉第七	6月25日	中嶋亮順 センター所員	教化概論－アフターコロナにおける教化－
宮城	7月7日	鈴木芳謙 センター長	これからの寺院教化活動のあり方
下総香取・ 茨城第二（合同）	10月13日	伊藤尚徳 センター所員	葬儀・法事で役立つ釈尊・お大師様の教え (含、噠噠の文)

※「講師」の肩書きは開催当時のもの

令和4年度 その他研修会等 出講一覧

教 区	日 時	講 師	テー マ
第61回中央布教師会総会	4月15日	鈴木芳謙 センター長 伊藤尚徳 センター所員	「生きる力-仏さまに祈り、仏さまと出会う-」 (鈴木センター長) 「ご宝号から始まる、仏さまへの祈り」(伊藤所員)
安房第三教区寺庭婦人会	5月5日	上村正健 センター所員	御朱印帳づくり お大師さまの青少幼年期
智山寺庭婦人連合会総会	5月13日	倉松隆嗣 センター所員	「宗祖弘法大師ご誕生1250年について」
教師講習所教化応用科1年次(前期)	5月25日	吉田住心 センター専門員	教化研究Ⅱ インターネット活用
教師講習所教化応用科1年次(前期)	5月26日	鈴木芳謙 センター長	教化研究Ⅰ 相談活動概論
教師講習所教化応用科1年次(前期)	5月26日	中嶋亮順 センター所員	教化研究Ⅲ 生命倫理・死生学 教化研究Ⅳ 自死問題・尊厳死
教師講習所教化応用科1年次(前期)	5月27日	島 玄隆 センター所員	教化指導法Ⅱ 口説布教の指導法
第23回智山総合研修会	6月1日	伊藤尚徳 センター所員 中嶋亮順 センター所員	第2分科会（中央布教師会） 「ご宝号から始まる、仏さまへの祈り」(伊藤所員) 第3分科会（智山青年連合会） 「いのちは誰のもの？～現代における「生」を考える～」(中嶋所員)
大正大学講義	6月14日	中嶋亮順 センター所員	仏教学基礎ゼミナールⅢ
教師講習所基礎科1年次	6月22日	鈴木芳謙 センター長	教化推進 教化とは何か 教化目標 私たちの目標 実践布教Ⅰ 智山勤行式
教師講習所基礎科1年次	6月23日	倉松隆嗣 センター所員	実践布教Ⅱ お仏壇・祈り 実践布教Ⅲ 十善戒
智山教学研修所一般2期	8月21日	池田裕憲 センター所員	教化復習
智山教学研修所一般2期	8月22日	池田裕憲 センター所員	教化Ⅱ 智山派の現状と課題 写経体験、法話実習等 阿字觀 阿字觀体験
教師講習所教化応用科1年次(後期)	9月26日	中嶋亮順 センター所員	実践布教VI 文書伝道
教師講習所教化応用科1年次(後期)	9月29日	高岡邦祐 センター専門員	実践布教VII 青少幼年教化
教師講習所教化応用科1年次(後期)	9月30日	上村正健 センター所員	教化指導法Ⅲ 阿字觀
智山専修学院講義	2月10日	鈴木芳謙 センター長	寺院におけるさまざまな教化活動（推奨する教化活動「お仏壇」「阿字觀」「青少幼年教化」）を体験する
福島第1教区布教師会講習会	2月15日	島 玄隆 センター所員	ご宝号「南無大師遍照金剛」の唱和・「洒水加持とお授け」
埼玉第1教区寺庭婦人講習会	2月16日	倉松隆嗣 センター所員	お大師さまのご生涯について

※「講師」の肩書きは開催当時のもの

D. 出版物と教化推進

※頒布数は令和5年3月31日時点の集計値

①生きる力SHINGON 檜信徒の「生きる力」を育む仏教総合教化誌

- 第109号** | 令和4年6月1日発行 頒布数100,889部
特集 初めてお寺の行事に参加して～金剛合掌・洒水加持・お授け・南無大師遍照金剛～
- 第110号** | 令和4年9月1日発行 頒布数50,056部
特集 「生きる力」とお大師さま～ご宝号から始まる仏さまへの祈り～「御詠歌」
- 第111号** | 令和4年12月1日発行 頒布数83,944部
特集 ようこそ総本山智積院へ～お大師さまの祈り、お大師さまと出会う智積院参拝～
- 第112号** | 令和5年3月1日発行 頒布数52,081部
特集 「生きる力」とお大師さま～安らかなる心に至る仏道修行～写経・写仏～

II

令和4年度教化目標の推進



②智山ジャーナル 智山派教師の自己研鑽と資質向上を目指す専門誌

- 第96号** | 令和4年6月1日発行
特集 宗祖弘法大師ご誕生1250年記念特集 お大師さまのご遺徳を伝えるためにI
- 第97号** | 令和4年11月1日発行
特集 宗祖弘法大師ご誕生1250年記念特集 お大師さまのご遺徳を伝えるためにII
- 第98号** | 令和5年2月1日発行
特集 宗祖弘法大師ご誕生1250年記念特集 お大師さまのご遺徳を伝えるためにIII



③ポスターカレンダー

令和4年9月1日発行

檀信徒頒布用B2判カレンダー

国宝障壁画「桜図」「楓図」

1部100円

頒布数19,883部



④教化目標(わたしたちの目標)啓発ポスター

令和5年3月発行

教化目標「生きる力—仏さまに祈り、
仏さまと出会う」の啓発と
お大師さまに手を合わせて
ご宝号を唱え、祈ることの意義や
その大切さを伝えるポスター

画:長谷川優 師



⑤柱掛けカレンダー「今月の法語」

令和4年9月1日発行

檀信徒頒布用カレンダー

お大師さまの著作に学ぶ～『秘蔵宝鑑』～

揮毫 布施淨慧 犀下

1部100円

頒布数121,254部



⑥檀信徒研修会チラシ

令和4年8月1日発行

総本山智積院開催の

「檀信徒研修会」参加推奨のチラシ



※頒布数は令和5年3月31日現在

⑦寺子屋かわらばん Vol.13

令和4年3月31日発行
寺子屋活動に関する
本宗寺院・教会の交流誌



⑧年報25号

令和4年8月1日発行
智山教化センターの
1年間の活動報告



智山派寺院専用ホームページからのダウンロード版

教化活動推進のすすめ「年中行事に教化活動を」

教化推進施策に基づき、
年中行事で行われる法要や
「推奨する教化活動」において、
「洒水加持とお授け」「金剛合掌」
「ご宝号」を取り入れるうえで、
教師向けに檀信徒への
説明のしかたや次第例などを
解説した資料

〈ダウンロード資料一覧〉
青葉まつりに教化活動を
施餓鬼会に教化活動を
盂蘭盆会に教化活動を
彼岸会に教化活動を
大般若会に教化活動を
成道会に教化活動を
除夜の鐘に教化活動を
節分会(星まつり)に教化活動を
花まつりに教化活動を



企画・編集 「宗祖弘法大師ご誕生1250年慶讃事業」

①青少幼年教化リーフレット

令和4年4月1日発行
お大師さまについて
知っていただくなための
青少幼年リーフレット



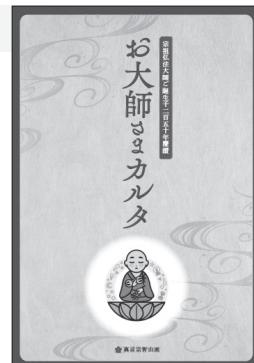
②正当年ポスター

令和4年4月1日発行
令和5年の宗祖弘法大師ご誕生
1250年の正当年に向けたポスター



③お大師さまカルタ

令和4年11月発行
お大師さまのご生涯について
楽しみながら学ぶための
いろはカルタ



④今に息づくお大師さまの信仰と伝説

令和5年2月1日発行
現在も続く各地のお大師さま
信仰についてまとめた小冊子



III 教化推進レポート

1 「教化を考える会」ならびに「他宗派・他団体との交流会」開催報告

智山教化センター 所員 平野隆光

1. はじめに

智山教化センターは、真言宗智山派の教化活動を推進し、実動させることを目的の一つとしている。そのための具体的方策として、主には本宗の教師や寺庭婦人または本宗寺院の檀信徒向けに、さまざまなセミナーや研修会の実施、出版物の発行、社会問題などの調査等情報収集、また広く教化活動に係る提案、相談業務等を展開している。

これらの取り組みはいわば「アウトプット」であり、一つひとつの業務の遂行には、日頃の「インプット」が不可欠である。教化とは、相伝された事教二相をいかに現代社会に展開、還元するか、という現状への応用力がより求められるものといえるだろう。また、新型コロナウイルス感染症の流行などはその最たる例であるが、社会状況の変容は、私たちの価値観や生活様式すらも変えてしまう。教化には現代社会への応用力が求められるのだから、「教化活動を推進する」というミッションを掲げる教化センターでは、日頃からインプットを重要視し、そのうえで時々の最適解を提案するよう努めている。本稿で報告する「教化を考える会」「他宗派・他団体との交流会」も、本宗の教化のさらなる推進に資する大切なインプットの機会である。

2. 令和4年度 「教化を考える会」開催報告

「教化を考える会」は、智山教化センターの構成員（所員、専門員、担当事務職員）を中心に、現代における社会問題や教化実践に必要な情報、知見を得るために、宗内外から講師を招き、講義ならびに意見交換形式で行われている内部研究会である。

令和4年度は全5回の開催となった。各回のテーマ、講師（肩書は開催当時のもの）については以下のとおりである。なお、前年度（令和3年度）の「教化を考える会」は全6回の開催で、そのうち3回は「新型コロナウイルス感染症」に関する研修会であったが本年度は、異なる視点からのテーマとなった。

＜令和4年度「教化を考える会」開催一覧＞

開催日	テーマ	講師
4月12日	寄り添いが導く新たなウェルビーイングの形	高橋英之 氏
8月25日	教化活動実践セミナー実施に向けての意見交換	石川照貴 師
11月25日	LGBTQについての理解を深める	勝又栄政 氏
1月31日	臨床宗教師の現状とこれから	松本峰哲 師
3月30日	寺院とコミュニティカウンセラー	田中純 氏

【第1回（令和4年4月12日）】

「寄り添いが導く新たなウェルビーイングの形」
講師：高橋英之 氏（大阪大学大学院基礎工学科特任准教授）

人間には「誰かに寄り添われている感覚」を得たいという欲求があり、それがコミュニケーションロボットを作る理由の一つになっている。

非人間であるコミュニケーションロボットや人工知能（AI）が寄り添いの感覚を提供している現状、また人間が求める「寄り添いの感覚」とは何なのか、その本質を探る機会となった。

寄り添われているという感覚とは、換言すれば「孤独ではない」という感覚であり、「居場所がある」という感覚である。人々はこれらを求めており、この感覚を得られる場所・モノが自分にとっての安全基地でありパートナーとなる。

地域コミュニティに根差す寺院は、人々の求めに応じ、パートナーとなることができる。そのためには、寄り添うということの本質を探り、ロボットやAIなどの知見も取り入れながら、これからの中社会に適応していく柔軟性も不可欠であると学んだ。

【第2回（令和4年8月25日）】

「教化活動実践セミナー実施に向けての意見交換」
講師：石川照貴 師（智山講伝所非常勤所員、智山教化センター専門員）

令和4年度の「教化活動実践セミナー」では「写経会」を取り上げるため、その実践に伴う作法（事相）の解説を、どういう形であればプログラムに組み込めるかの議論を交わした。

本宗の推奨する「金剛合掌」や「洒水加持とお授け」をはじめ、教化活動に関連する作法には、一つひとつに深い意味がある。それを教化活動に応用しようとすると

き、“本来、それらは教化者自身の研鑽の上に自ずと築かれるものであり、簡単に教示できるものではない”という前提を踏まえ、“教化活動の第一歩を踏み出すきっかけとして、どのような提案ができるか”を探った。

【第3回（令和4年11月25日）】

「LGBTQについての理解を深める」

講師：勝又栄政 氏（NPO法人東京レインボープライド執行部、ボランティア部門統括長、宮城教育大学非常勤講師）

ご自身も LGBTQ 当事者である講師のご経験も踏まえながらご講義いただき、性的マイノリティの現状、取り巻く社会状況、求められる配慮等を学び、変化・多様化する価値観の中での今後の寺院・僧侶の在り方を探求した。

日本における性的マイノリティの人口割合は約1割ほどであるというが、実際、周囲に性的マイノリティの知人・友人がいるという人はどれだけいるだろうか。日本人口約1億2千万人のうち、最も多い名字「佐藤・鈴木・高橋」の合計は約500万人で、約4%である。つまり、これらの名字の人と出会う確率より、実は性的マイノリティ当事者との接点の方が多いということだ。この現状を鑑みると、私たちの周囲には「カミングアウトできない、していない人」が多くても多いという事実がある。

仏教界においても、例えば「戒名」等について性的マイノリティへの配慮をどうするかという課題があるが、私たちが気づかないだけで「人に打ち明けられない苦しみ」を抱えている人が多くいるという現実がある。この現状に対し講師は、無関心でなく、積極的に関わりを持とうとする姿勢を求めている。

慈悲を掲げる仏教であるからこそ、自分

とは異なる価値観を持つ者との共生、肯定、能動的な配慮などについて学びを重ね、それらを社会に還元する努力が求められている。

【第4回（令和5年1月31日）】

「臨床宗教師の現状とこれから」

講師：松本峰哲 師（種智院大学教授・臨床密教センター長）

東日本大震災で脚光を浴びた宗教者による寄り添い。その必要性から生まれた「臨床宗教師」。あれから約10年が経った現在、改めて臨床宗教師の役割、現状、課題等について学び、宗教者だからこそ実践できる寄り添いの形を探った。

臨床宗教師は、布教・宗教勧誘、営利を目的とせずに、相手の価値観・信仰等を尊重しながら、人々に寄り添う宗教者である。対面する人々の宗教・信仰に関係なく寄り添い、スピリチュアルケアや宗教的ケアを行っている。

宗教者の活動として一つの究極型であると思うし、これらの活動や理念については深く共感する。一方、理想的であるが故に現実的な課題も多い。例えば、私たち僧侶が相談者から「死後、私はイエスさまの天国に行けますか？」と聞かれれば、なんと答えるべきなのだろう。

臨床宗教師の掲げる理想、直面する課題についての学び、考察を経て、一寺院・一僧侶としての存在意義を考えさせられた。

なお、本稿の次節では、高橋一晃専門員が臨床宗教師の現状と課題について詳述されているので、ご一読のうえ、改めて宗教者の存在意義や役割についてご省察いただければ幸いである。

【第5回（令和5年3月30日）】

「寺院とコミュニティカウンセラー」

講師：田中純 氏（心理教育カウンセラー、

(一社) コミュニティ・カウンセラー・ネットワーク代表理事など)

コミュニティ・カウンセラー（以下CC）についての学びをとおし、「寄り添う」ということへの理解を深め、地域コミュニティにおける「心の安全地帯」としての寺院・僧侶の可能性を探った。

身体的なケガや病気と同じく、心の不調やストレスには、予防や早期の治療が大切である。取り返しのつかない状況になる前、すなわち“臨床前”に、身近な相談相手として、相談者の「心の安全」を支援するのがCCの役割である。

講師は、「寺院・僧侶は、CCの役割を効果的に果たすのに理想的な存在だ」と仰った。それは、檀信徒と“継続的に”交流ができるからである。例えば、メンタルクリニック等への受診は、一度きりで終わってしまう可能性もある。一方、寺院においては、葬儀を経た後の四十九日忌や年回忌の法事などで、継続的に檀信徒との交流の機会を持てる。

専門的な治療ではなく、「心の安全地帯（＝拠り所、命綱）」を提供するのがCCの役割であり、それには相談者に真摯に向き合うという姿勢と、継続的な交流が求められる。だからこそ、寺院・僧侶は、地域コミュニティにおける「心の安全地帯」として機能できるのである。

CCの役割、活動および心のケアについての基礎的な知識を学ぶことにより、檀信徒に「寄り添う」とはどういうことかを改めて学ぶ機会であったが、先生が「同行二人」のキーワードを取り上げ、まさにこれこそがCCの理想形だとお話しされたことも印象的だった。

以上、令和4年度に開催された全5回の「教化を考える会」だが、特に第4回と第5回は、教師講習所（教化応用科）での新力

リキュラムを検討する側面もあった。

コミュニケーションを苦手とする若者が多いといわれて久しいが、これは僧侶も例外ではない。特に教化活動には、檀信徒との良好なコミュニケーションが不可欠である。この現状に対し、教化センターでは、若手僧侶のコミュニケーション能力向上に資するような機会を創出できないかと検討を重ねてきた。

臨床宗教師もCCも、ともに「寄り添い」を本質とする専門家である。他者と近い距離感で接し、その心に安らぎを与えるためには、気持ちだけではなく、専門的なスキルや心構えも必須であろう。寄り添いの専門家たちからそれらを学ぶことを糸口とし、新カリキュラムの策定を進めることも意図して、第4回、第5回の教化を考える会は開催された。

「コミュニケーション」をテーマに掲げ、それを講義といえるまで昇華させることは甚だ困難であるが、教化を考える会での学びを生かして、新カリキュラムの策定を進めたい。また、この新カリキュラムのみならず、教化を考える会をとおして得られた多様な知見を参考に、本宗の教化推進に努めたい。

3.令和4年度 「他宗派・他団体との交流会」開催報告

「他宗派・他団体との交流会」は、その名のとおり本宗以外の宗教団体をはじめとする諸団体・諸研究所などと関係を築き、情報収集や意見交換をとおして他の宗教組織がどのような教化活動を展開しているのか学び、本宗の今後の教化推進についてのヒントを得る機会でもある。

【第1回（令和4年10月31日）】

交流団体：神田神社（神田明神）

会場：神田神社（千代田区外神田）

「神田明神」として知られる神田神社へ訪問し、神社の業務や教化への取り組みを学び、また情報交換し、親睦を深めた。

神田神社は積極的に流行を取り入れるなど、自由で柔軟性に富んだ発想でさまざまな活動を展開している。例えば、アニメ等の人気キャラクターと積極的にコラボし、デザイン性に優れたお守りや絵馬などをタイムリーに授与している。そのことが幅広いジャンルのファン層を獲得することになり、活性化はもちろん、結果的に神田明神に対するファンを増やす、ということにながっている。しかも、それらは一職員の発案から生まれるとのこと。もちろん、実現に至らないことが多いというが、職員の意志を尊重する環境を神社が整え、そのことで職員は積極的に職務を遂行し、それが神社の活性、発展を促すという好循環が神田神社にある。それが実現できるのは、私たち仏教には「宗派」という一種の“枠組”がある一方、神社にはそれがないということも大きな理由といえよう。包括的組織である神社本庁はあるが、各神社の活動についてはそれぞれが権限を持っているので、“小回りが利く”運営が実現できているということだ。

交流会当日は、神職をはじめ10名を超



他宗派・他団体との交流会（神田明神）

える職員の方々とお話ししたが、一人ひとりが理想的な神田神社の在り方を心に描き、積極的かつ能動的に情熱を持って業務に取り組む姿勢がひしひしと伝わってきた。よい意味で「空気を読まない」職員間の関係性が神田神社を輝かせていた。

【第2回（令和5年3月7日）】

交流団体：真言宗善通寺派

会場：善通寺関東別院（座間市相模が丘）

令和2（2020）年に落慶したばかりの関東別院は、外観は2階建ての建物となっている。1階が本堂（本尊薬師如来）となっていて、2階は多目的ホール（斎場）、地下には遺体安置所がある。

宗派の意向として「関東圏の信者を新規に獲得すること」を大きな目的として建立されたが、布教（法話会など）のみならず、葬儀や法事などの供養の機会をとおしても、信者の獲得が期待できる構造となっている。その機能を最大限に発揮するため、提携する葬儀業者を厳選したり、遺族が遺体といつでも対面できる環境を整えるなど、接点を持てた信者との信頼関係の構築に力を注いでいる。正面玄関には石造の修行大師像がいらっしゃるが、これは篤信の信者によって建立されたという。関東別院は、まさにコロナ禍が深刻化した時期に、多くの困難を乗り越えて開設された。社会的にもあらゆる活動が制限される中、地道に教



他宗派・他団体との交流会（善通寺関東別院）

化活動を進めた。その努力の一つの成果であろう、わずか一年余りで、修行大師像を寄進するような篤信者を得たのである。

当日は、予定時間を大幅に過ぎても、対応いただいた安藤主監とのお話は絶えることがなかった。善通寺派としての個々の布教・教化の事例をここで挙げることはできないが、特筆すべきは「宗派の目的達成のため、担当者が能動的に業務に当たる姿勢」であった。

4. おわりに

DXやSDGs、ダイバーシティ、少子高齢化、過疎化、さらにはコロナ禍など、私たちを取り巻く社会環境や価値観は、目まぐるしい変化を続けている。寺院や僧侶への影響もその例外ではない。私たちは環境の変化をどのように受け入れていくべきだろうか。また、求められる役割を、果たすべき使命を正しく認識できているのだろうか。これらの問いに対する正解はない。だからこそ、私たち一人ひとりが常に問題意識を持ち、自己反省を怠らず、研鑽を重ねながら、「自分の答え」を見出さねばならないだろう。また、その一時的な答えに執着せず、自身の内なる価値観の変容に合わせて答えをアップデートさせていく柔軟性も重要であろう。

寺院も社会の中に存在している以上、その社会に適応できなければ淘汰されていくだろう。今回報告した「教化を考える会」、「他宗派・他団体との交流会」から得られた情報や知見を引き続き提供し、それが社会に適応し、また、「自身で考えるためのヒント」の一助となるように努めたいと思う。

2 臨床宗教師の現状と課題

智山教化センター 専門員 高橋一晃

はじめに

「臨床宗教師」は、被災地や医療機関、福祉施設などの公共空間で心のケアを提供する宗教者であり、欧米のチャップレンに対応する日本語として考えられた。布教・伝道や営利を目的とするのではなく、対象者の価値観を尊重しながら、宗教者としての経験を活かして、苦悩や悲嘆を抱える方々に寄り添い、かけがえのない物語をあるがまま受けとめ、そこから感じ取られるケア対象者の宗教性を尊重し、おもに傾聴という手段をとおして「スピリチュアルケア」と「宗教的ケア」を行う。仏教のみならずキリスト教、イスラム教、神道、天理教など、さまざまな信仰を持つ宗教者が協力している。平成23（2011）年の東日本大震災を機に、東北大学で養成がはじまり、龍谷大学、鶴見大学、武蔵野大学、種智院大学、愛知学院大学、上智大学、大正大学、日本スピリチュアルケアワーカー協会等の諸大学・機関もこれに取り組んでいる。平成30（2018）年からは一般社団法人日本臨床宗教師会によって、「認定臨床宗教師」の資格認定が行われ、令和5（2023）年2月現在、約230名が認定臨床宗教師となっている。

なお、東北大学の実践宗教学寄附講座は令和4（2022）年度をもって閉講となり、令和5（2023）年度からは「死生学・実践宗教学専攻分野」に引き継がれている。

筆者は智山派の教師であり、智山教化センターの専門員であるが、平成26（2014）年に東北大学の第5期の臨床宗教師養成課程を修了し、平成30（2018）年に日本臨

床宗教師会の認定臨床宗教師となった。本稿はこれまでの研修や実践、さらに令和5（2023）年1月31日に行われた「教化を考える会」の講師をつとめた種智院大学・臨床密教センター長で日本臨床宗教師会の理事でもある松本峰哲師の「臨床宗教師会の現状とこれから」の講義の内容も参考にさせていただきつつ、私見をまとめたものである。

臨床宗教師のミッションと現状

平成28（2016）年2月に日本臨床宗教師会が制定した「臨床宗教師倫理綱領」には、臨床宗教師が遵守すべき事項として以下の項目が示されている。

- 臨床宗教師はケア対象者の個の尊厳を尊重しなければならない。またそれを傷つけることのないよう、常に最大限の配慮をしなければならない。
- 臨床宗教師はケア対象者の信仰・信念や価値観、社会文化的背景等を尊重しなければならない。
- 臨床宗教師は布教・伝道を目的として活動してはならない。また、そのような誤解を生むような行為は控えなければならない。
- たとえ臨床宗教師とケア対象者の所属宗教・宗派が同じであっても、その両者の信仰の内実は全く同じわけではない。臨床宗教師はケア対象者の個別性を丁寧に受け止め、尊重すべきである。
- ケア対象者に対する宗教的な祈りや唱えごとの提供は、ケア対象者から希望があった場合、あるいはケア対象者から同意

を得た場合に限る。それを提供する際には、ケア対象者のみならず周囲に対する配慮も必要とされる。

- いわゆる「宗教的なゆるし」等、伝統的に宗教者が担う役割は、それがケア対象者から求められた場合にのみ、同時にその臨床宗教師自身がそれを提供するのにふさわしいと判断する場合に限って提供することができる。
- 宗教的物品（聖典、冊子、パンフレット等）の配布も、基本的にケア対象者からの要請があった場合に限る。宗教的物品の販売は、これを行わない。販売代行をケア対象者に依頼することも同様に禁ずる。

（抜粋）

このように、臨床宗教師にはきわめて高い倫理観や中立性が求められる。

臨床宗教師の活動の場としては、被災地の仮設住宅、緩和ケア病棟、高齢者施設、高齢者の自宅等が考えられる。宗教者がそれらの活動場所に出向き、徹底的に話を聞く。これが「傾聴」である。

ケア対象者は、

- 家族を喪って悲しみに暮れている人
- 災害に遭い居宅や財産を失った人
- 余命宣告を受けて心が揺れている人、およびその家族、友人
- 「死の現場」に近いところで働くことによってメンタルの不調に襲われている人
- その他、何がしかの「生きづらさ」を抱えている人

など、多岐にわたる。

ケアのとりかかりとしては「お悩みはありませんか」ではなく、「お話を聞かせていただけますか」というアプローチを取ることが一般的である。最初は「何が目的だろう」などと警戒されることもあるが、接する回数を重ねていくうちに先方の誤解も

解け、心の内を話してくれるようになる。1回限りの対話というより、定期的な傾聴で会話を積み重ねていくことにより、ケア対象者に落ち着きを得てもらったり、心の拠り所を探したりする。

ただそこで、到達しなければならない何がしかのゴールが明確に定められているわけではない。「ゴルフならゴルフ、釣りなら釣りの話で終始しても、それで対象者の心が落ち着くのであれば問題ない」「独自の傾聴のスタイルを見つけることが大事」などの「傾聴の基本」を、筆者は研修で繰り返し学んだ。

臨床宗教師会の活動がメディアで報じられるのは大規模災害の関連が多い。平成29（2017）年の九州北部豪雨の際には災害直後から九州臨床宗教師会が福岡県朝倉市等の被災地に入り、飲料・食料等の支援を行うとともに積極的な傾聴活動を行った。筆者も埼玉県から参加したが、家を失った被災者から「なんで自分たちがこんな目に遭うのだろう、夢も希望もなくなつた」という嘆きを聞く一方で「家族以外で話を聴いてくれる方がいることが、何よりうれしい」といった感謝の声も得た。「被災者の心の復興に寄与する」という、美しい言葉ではあるが現実的には極めて困難な目標に向かい、数年にわたり継続的な取り組みが行われている。

また、「カフェ・デ・モンク」という名の傾聴移動喫茶も東北地方を中心に定期的に開かれており、一般生活者が悩みや文句を臨床宗教師に吐き出してもらう、カジュアルな傾聴の場として一定の認知を得ている。

令和2（2020）年春からの新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、それまで臨床宗教師を受け入れてくれていた多くの病院や高齢者施設から「訪問の自粛」を

求められた。対面による傾聴と異なり、リモート形式での傾聴は守秘義務の遵守と多重関係の禁止、透明性の確保などの課題を抱えており、実質的に臨床宗教師の活動はほぼ停滞した。令和5（2023）年春の時点では新型コロナウイルス感染症は落ち着きを見せ、各施設の訪問自粛要請も緩和されつつあるが、ケア対象者、および同じ施設にいる方の多くが高齢者や疾患を抱えた方であることを考慮し、慎重な上にも慎重な対応が求められる。

臨床宗教師活動の問題点・課題

●「対価を得てはならない」というきまり

かねてより、臨床宗教師活動の課題や問題点もいくつか指摘されている。臨床宗教師倫理規約（ガイドライン）および解説には、「臨床宗教師はケア対象者から金員を受け取り、ケア行為を宗教的宣伝に使うなど個人的欲求または利益のために行動してはならない」とある。つまり、傾聴の対価をケア対象者や対象者が所属する組織から受け取ってはならないのである。「お金目当ての活動ではない」というスタンスを明確にするためであるが、依頼者からは「それではかえって依頼しにくい」という意見もしばしば聞かれる。

この問題へのブレイクスルーとしては、日本臨床宗教師会や各地域の臨床宗教師会に活動支援の寄付を受ける、という方法が提案されている。

●「布教・伝道不可」という縛り

「葬儀は受けるべからず、戒名はつけるべからず、布教はするべからず」といった縛りがある。中立性を堅持する観点から頷けない話ではないが、一方において「真言密教に興味があるので、お大師さまの教え

について詳しく教えてください」といった依頼にも応えられないのは、なんとも歯がゆい思いである。「真言密教の奥深さを檀信徒以外の多くの人に伝えたい」と思ったら、臨床宗教師と名乗らずに真言僧侶として活動するしかない。

加えて、この縛りゆえに、「各宗派の本格的な支援が受けにくい」という問題が生じている。「教化活動を行えない団体の支援はできない」という各宗派の見解はもっともある。

●ケア対象者の家族の反応

前項にも関連するが、活動を行っていく中でしばしば体験するのが「高齢のケア対象者はきわめて良心的に臨床宗教師を受け入れてくれるが、その子、孫らに過度に警戒される」という事例である。「葬式を取ろうとしているのでは」「戒名を付けようとしているのでは」といった邪推を受けることもある。これに関しては当該施設での傾聴活動を積み重ねていくことにより誤解を解いていくしかない。

●公共空間側の受け入れ態勢

一般生活者にも、公共空間にも、「僧侶は亡くなつてから呼ぶもの」という意識がまだまだ強い。この点においては、キリスト教や新宗教系の宗教者に大きく後れを取っている、ともいえる。彼らは背広姿で病室に入りし、和やかにケア対象者とコミュニケーションを取っていることが多い。

僧侶については、うっかり僧衣で病院に出向くと靈安室に案内された、というケースもある。また自治体等が運営する病院においてはそもそも「宗教者の関与」を嫌うことが多く、傾聴を含む院内での宗教的な行為を一切禁じているところもある。

●実践の場所

コロナ禍で「人と人との接触」が極端に制限される社会においてはある意味やむを得ないことであろうが、コロナ禍以前から「研修を終えたのはよいが、実際に傾聴活動を行う場所が与えられない」という意見も聞かれる。日本臨床宗教師会や各地の臨床宗教師会には一般生活者からの希望が寄せられるがその数は多くなく、すべての臨床宗教師が間断なき活動を行えるような状態ではない。筆者はファイナンシャル・プランナーの資格も保有しており、活動の一環として令和4（2022）年12月、栃木県の訪問介護ケアステーションにうかがい、お金に関するセミナーの講師を行った。その際に先方のスタッフからステーション利用者の「こころの問題」に対応する宗教者の派遣を相談されたので、関東臨床宗教師会に繋ぎ、近県在住の臨床宗教師が現地に出向き、試験的に同ステーションでの活動を行っている。だがこのようなケースは稀で、臨床宗教師の集まりにおいては、「せっかく研修で身につけたノウハウを実践する場所がない」という悩みがしばしば聞かれる。悩みを抱えている人が少ないのでなく、「臨床宗教師」の存在が知られていないのである。認知度の向上は大きな課題である。

●檀務との兼ね合い

臨床宗教師の活動は原則として対価を得てはならない。そしてその時間は当然のことながら檀務は行えない。檀信徒が予告なく自坊に来寺することは珍しくないが、あまりに不在の時間が多いため「我々への対応は二の次なのか」といった思いが檀信徒に生まれても不思議ではない。加えて、臨床宗教師としての活動時間が増えると中長期的には宗教法人の運営にマイナスの影響を及ぼす可能性もある。

●当該地域の宗教者への配慮

臨床宗教師が訪問する公共空間の近くには通常、何らかの宗教施設がある。もとより臨床宗教師に「傾聴活動により新たな檀信徒を獲得しよう」などという思いがあるわけもないが、現地の宗教者から複雑な思いや疑念を抱かれる可能性もゼロではない。その意味でも「金員を受領しない」「葬儀を受けない」「戒名授与の依頼も受けない」という原則は厳守しなければならない。

●組織の体制

日本臨床宗教師会、各地の臨床宗教師会とも、限られた人数のスタッフが本業の合間に事務処理等を行っており、会員が期待したレベルのレスポンスが得られないことがある。ましてや、一般生活者に対する臨床宗教師の認知度向上に向けた活動等を行う余裕はないのではないかと推察する。

●臨床宗教師自らのバーンアウトのリスク

東日本大震災直後の被災者対応は別として、近年の活動においては、「一人のケア対象者から頻繁に傾聴を求められる」という事例が発生している。場合によっては深夜の電話、あるいは予告なく自坊に来寺するなどのケースもあり、真摯に対応する臨床宗教師ほど家族まで巻き込んだトラブルが生じ、メンタルを病んでしまうことにも繋がっている。近年の研修においては、このバーンアウト（燃え尽き）を避ける、つまり自分の身を護るために、「対応時間を予め告知してから傾聴を始める」「自坊の場所を明らかにしない」などの対応策が提案されている。

●真言教師にとっての傾聴のプライオリティ

「ただ念佛のみ」という親鸞の言葉に代表されるように、民衆との積極的な対話に

よって布教を行ってきた浄土真宗などと異なり、本宗においては「身・口・意」に象徴される「内なる自分との対話」が宗教者としての使命ではないか、という意見も聞かれる。まして、宗教施設でなく病院等の公共空間にまで出て行って話を聞くことが、本宗の教師にとってどれだけ重要なミッションであるのか、どの程度の優先順位を持って取り組むべき課題であるのかは、意見が分かれるところであろう。

おわりに

臨床宗教師の存在と行動は、特に東日本大震災の復興過程、一部の緩和ケア病棟等においてケア対象者から一定の役割を果してきた。メディアにも再三取り上げられ、徐々にではあるが認知度は高まりつつあるもの、と思っていた。

ところが、コロナ禍で状況は一変した。受け入れ側の公共施設から立ち入りを遠慮するよう求められ、忸怩たる思いを抱える臨床宗教師が続出した。

現在はさまざまな制限の緩和を受け、活動の仕切り直し、受け入れ施設との関係の再構築にトライしている状況である。

私事で恐縮だが、筆者は東日本大震災の

3ヶ月後、宗教者災害支援連絡会の活動に参加し、福島県の避難所を訪れた。またその半年ほど後、長男を自死で失った檀徒の相談を受けるという問題に直面した。このとき、傾聴（当時はその言葉さえ知らなかつた）のノウハウをまったく持たずにグリーフケアに臨んだ自分を強く反省し、それが臨床宗教師の研修を受講するきっかけとなつた。

その結果、悩みを抱える人へのひととおりの対応を学び、その後の実践や日常の檀務においてある程度の「寄り添い」は行えている自覚を持っている。また研修で構築できた宗教・宗派横断的な人脈も大きな財産である。

今回述べてきたように、臨床宗教師は現状、さまざまな課題を抱えていると感じる。今後、研修や実践のカリキュラムのブラッシュアップ等を通じて、「僧侶が宗教者としての幅を広げるためのひとつの役割」としてより有機的に機能することを、心より願うものである。

あわせて本宗として、傾聴的な活動をとおして、お大師さまの教えをより丁寧に、よりわかりやすく伝えていくための方法を別途模索していくことも必要であろう。



臨床宗教師研修 平成25（2013）年 カフェ・デ・モンクでの傾聴実習の様子

3 ウィズコロナ時代の教化活動—ハイブリッド対応による教化—

智山教化センター専門員 鈴鹿大学学長 川又俊則

はじめに—3年目の日常—

昨年度からの新米学長の職務の一つは入学式や卒業式の式辞である。その原稿準備をするなかで、新型コロナウイルス感染症の爆発的流行により、令和2（2020）年3月の卒業式や同年4月の入学式が極めて困難な状況だったことを思い出す。コロナ禍3年間の困難を乗り越えた卒業生には敬意を表し、今後の活躍へのエールを贈った。新入生にはこれからともに頑張ろうと対面でじっくり話せた。室内のマスク着用も任意となり、令和5（2023）年5月以降はインフルエンザ同様の扱いになる。3年を経てウィズコロナの時代になったということだ。

他方、宗教界ではその3年間で大きな変化があった。前回の寄稿¹⁾から3年が経つ。2021年度から実施している「宗教青年会による教化活動の継承と地域の創造—ウィズコロナ対応を視野に入れて—」というテーマの科研調査で、筆者は全国各地でさまざまな宗教集団についてコロナ禍での変化を見聞している²⁾。本稿はこれを踏まえた考察となる。

I. キリスト教界の試み、高齢者の模索

まず毎週礼拝・ミサを行っているキリスト教界の変化を見よう。令和2（2020）年に全国で緊急事態宣言が発せられた当初、多くの教会では対面の礼拝・ミサを中止した。直ちにオンライン配信に切り替えたところは少ないが、やがてさまざまなICT（情報通信技術）活用のノウハウが広がった。現在も外出を避けざるを得ない高齢者や基

礎疾患を持つ人などのために、オンライン説教の配信を併用しているところも珍しくなくなった。

教員のほとんどが教会周辺に住んでいたため、緊急事態宣言でも対面礼拝を継続した教会もあったが、多くは宣言に応じて教員の出席を止めた。宣言解除の後、出席者数を制限し複数回実施する分散礼拝が試みられ、プログラム内容を最小限にする短縮礼拝が行われるようになった。出席再開に際して、3密を避け、検温・手指消毒・換気徹底、講壇にアクリル板をつけ、出席者は間隔を空けた着席、讃美歌は「歌わない」「一番だけ」など工夫が凝らされた。ただし、礼拝後の会食懇談中止が継続するなど、コロナ禍以前の活動に完全に戻ったところはほぼない。

対外的な教化活動の制限は続く。子供たちが参加する教会学校は活動し難くなったり。教員の大半が高齢者という教会も多く、教会礼拝出席者数が従来の状態に回復するには、相当の時間がかかるだろう。

教会内の交わりの機会は減少し、教会離れによる信仰離れは、多くの教会で心配された。逆にこの状況で、宗教的なもの求めの人もあり、新来会の人が洗礼に結びついた例も聞く。説教などの動画配信以外に、手紙や訪問などを通じて教会に来ることができない人々へアプローチをしていた教会と、そこまでできていない教会があった。

出席再開後、従来の方法を少しづつ取り戻そうとする動きもある中で、青年牧師たちはICTを活用した積極的な教化へ舵を切っている。

Web会議システムを使えば、遠方の者

と長時間の対話も可能だ。互いに移動せずとも情報交換などしやすい。夜を行っている聖書研究会が、このシステムの導入で、対面だけだったときより参加者が増えたケースもある。オンラインによる同一教派における他教会への説教配信など、コロナ禍以前は行えていなかったものもある。インターネットラジオ配信などを含め、教会外の人々への教化活動を考えた場合、この積極的な取り組みは注目に値する。

II. 佛教界のハイブリッド対応

他方、佛教界でもこの3年間、YouTubeによる法話や大きな行事のライブ配信など、檀信徒以外も視聴可能なコンテンツは大きく広がった。対面で行われる法要などもコロナ禍でさまざまな変化が生じている。筆者が見聞した事例を紹介しよう。

まず、真宗高田派本山の専修寺（三重県津市）である。令和5（2023）年は親鸞聖人開教800周年、生誕850周年の記念すべき年である。前年5月にはプレイベントが行われ、国宝の御影堂に鳥や蓮などをモチーフとしたプロジェクト・マッピング映像が夜に投影された。昼には御参廟、降誕会、お待ち受け法会、演奏会・仏教讃歌の集い、フォトコンテスト作品展示、呈茶、ストリートピアノ、夜には竹灯り・雅楽演奏など行われ、境内にはマスクをつけた参詣者が多数参集していた。プロジェクト・マッピングは同寺のウェブサイトからYouTubeで視聴できるようにリンクが貼られている。

続いて、同寺で行われた今年1月のお七夜報恩講も、（私がこれまで参詣してきた）例年以上の参詣者が集っていた。手指消毒や検温、換気徹底などもあり、5月に公開される宝物館でのプレオープンで、VR映

像で体感する極楽浄土などの上映があった。

次に、東本願寺の別院である真宗大谷派吉崎別院（福井県あわら市）を紹介しよう。毎年恒例の「蓮如上人御影道中」は、令和5（2023）年で350回の開催を迎えた、文字どおり「蓮如上人の御影」を運ぶ伝統行事だ。同地域の門徒だけでなく全国から多くの門徒が集まる（令和元（2019）年は約400人）。4月17日京都の真宗本廟を経つ「御下向」と、5月2日に吉崎別院を経つ「御上洛」のことであり、約1週間かけ京都市とあわら市の約240kmの行程を、リヤカーを引いて徒步で移動し、途中で各所に立ち寄り法座が開かれる。4月23日—5月2日は吉崎別院で御忌法要が執行され、到着時、町内では提灯行列と消防団の神輿担ぎで入堂する。

令和2（2020）年は車両移動かつ短縮日程、輪番・職員等の内勤めで勤修され、一般門徒には法要参拝見合せを呼びかけた。令和3（2021）年も車両移動だった。令和4（2022）年は福井別院から吉崎別院まで徒步移動し、今年は従来の形式に戻った。また令和2（2020）年以降の御忌法要は吉崎別院のYouTubeチャンネルからライブ中継がなされた。未曾有の事態に同派関係者は検討を重ね、現代的要素を組み込みつつ対応した。

上記のように各宗派の大きな行事でも、コロナ禍を踏まえ展開されるようになった。そしてそれは、3年間の未曾有の事態に対し、各宗派でさまざまな試行錯誤がなされた結果ということだ。

他方、神社および新宗教各派でも、キリスト教界や佛教界同様に、コロナ禍で新たな対応をして現在に至っている³⁾。もちろん一般社会全体で同様に変化しながら適応が進んでいるが、宗教界でも上記で確認できるように変化は止まらない。

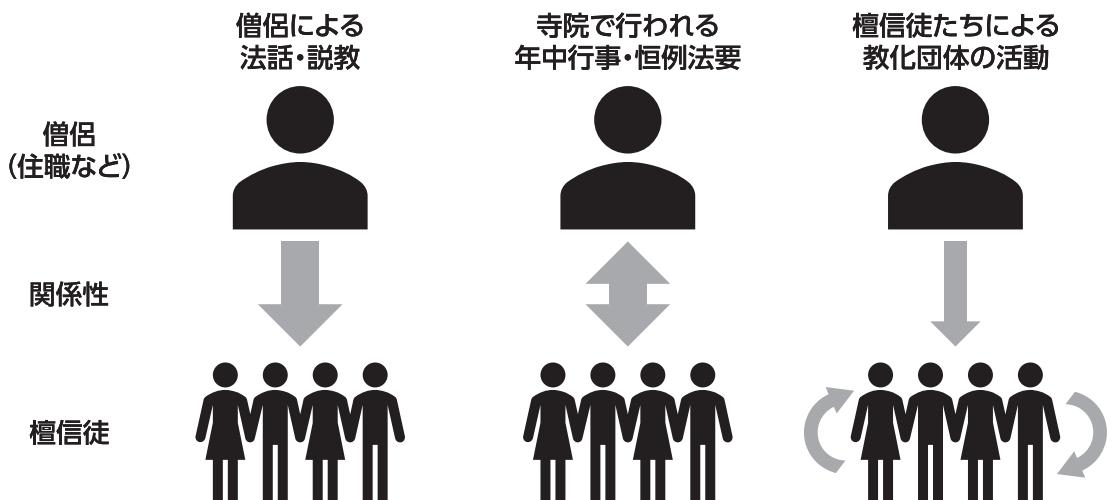


図1 教化活動の3区分

出典：川又2022:269] を一部修正

従来、対面の教化活動が前提とされていたことを思い返すと、現在は、対面とそれ以外の方法が並行して行われていることを指摘したい。つまり、対面型の教化活動と同時にオンラインを併用した年中行事やさまざまな活動がすでに定着しつつある。いうなれば、ハイブリッド（複数の組み合わせ）対応へ進んでいるのだ。

筆者は教化活動を図1のように、僧侶から檀信徒への直接的な法話・説教、年中行事・恒例法要など僧侶・檀信徒が共にかかわるもの、そして、檀信徒が中心的に活動する教化団体という3つに分けて考察したことがある⁴⁾。その拙稿では、教化活動について、檀信徒がいないと教化ができない脆弱性を論じ、他方、多様なスタイルが生み出されるという強靭性を指摘した。

III. 青年宗教者たちの活動

現在行っている筆者の共同研究では、全国の青年宗教者たちと対話を重ね、その実践を見聞している。そのいくつかを紹介しよう。

まずは、埼玉県の本宗寺院の一例である。檀信徒に対する菩提寺の活動だけでは

く、地域の交流の場を意識する住職は、人生のあらゆる場面に対応する寺院開放を進めた。例えば、夏休み寺子屋、遍照講、（近隣寺院と協力した）七福神巡り、新設した御堂での音楽コンサートやギャラリー、寺ヨガ、絵解きの集い、仏前結婚式などが展開された。住職はFacebookやInstagramを用いて行事の報告をしている。コロナ禍でイベント休止・行事縮小となつたが、毎月1回の法話と写経の会は継続開催した。参加者は行事や企画に関心を持つ人々が中心である。筆者も今年参加し、数年来の参加者や新参加者とともに、写経後の茶話会で懇談した。同じ興味関心を持ち、同じ体験をした同士の交流が、寺院でなされる意義を実感した。

続いて、福井県の高野山真言宗寺院の例である。この住職は、約3年間、朝のお勤めと短い法話を短時間でまとめ、SNSを通じて配信している。所属寺院の檀信徒というより、全世界への発信であり、それなりのレスポンスも見られた。また令和3（2021）年1月からは、坊守と住職の2人で宿坊を始め、月数回、家族や個人が利用し、同寺院の魅力が伝わっている。さらに令和

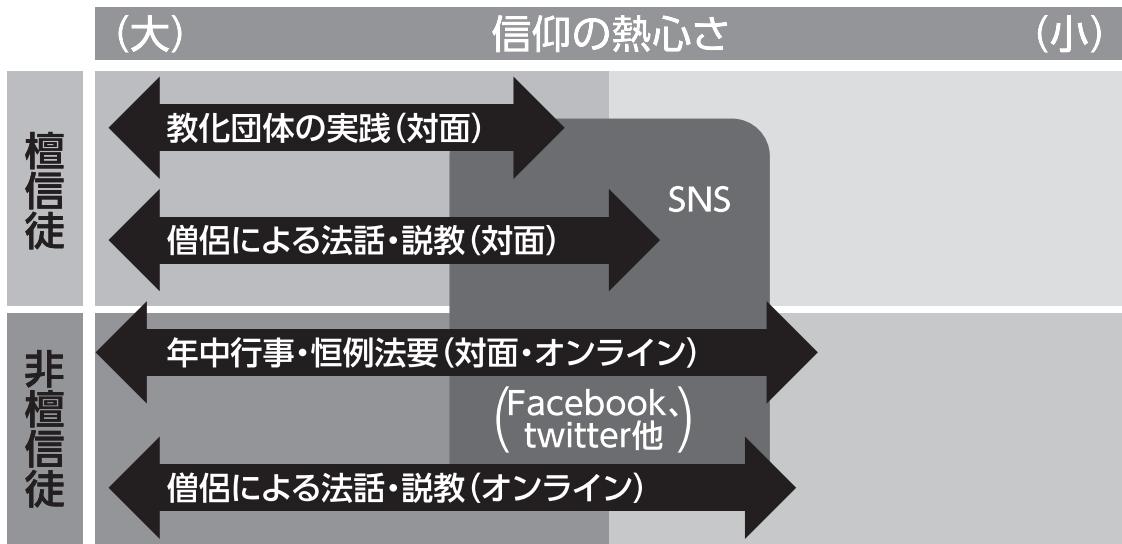


図2 対象・熱心さと教化3区分およびSNS

出典：川又2022：278] を一部修正

4 (2022) 年からは、修行・作務（さむ）から生まれた新感覚×非日常体験イベント「さむ活」を実践している。筆者も「地蔵磨き」の会に参加し、関心を持つ参加者たちと交流を持った。また、宿坊を体験し、ご住職と懇談しながら、寺院で長時間過ごす意義を感じた。このように、寺院を地域交流や仏教に関心を持つ人に開くという実践は、同寺院において徐々に定着しつつある。

そして、滋賀県の浄土宗寺院の例である。コロナ禍の令和2（2020）年から令和3（2021）年の状況は以下のとおりである。まず、御忌会・春秋彼岸会・十夜会などの法要を、住職は勤めるも、檀家参拝は中止とした。令和3（2021）年の年始の法要は檀家一軒につき参加者一名の入れ替え制、盂蘭盆会も入れ替え制で実施した。ただし、初盆の場合、家族のみ参加で実施した。法事や年忌法要も家族のみ参加と規模縮小でお勤めし、御斎は止めた。葬儀も規模縮小で実施し、町内の参拝を止めた。このような行事の自粛や規模縮小が続いたことで、檀信徒の意識にこれまでのような法要の規模や丁寧さを求めるくなるという様子もあったという。

他方、信仰継承を進めるため、浄土宗で提唱している慈悲つむぎ法要（体験的理）と慈悲つむぎセミナー（知的理）を、同寺院でも進めている（同セミナーの説明は同宗のYouTube動画あり）。

さらに、前回も紹介した亀山僧侶の会SANGAにも再度注目したい。コロナ禍以前から、地域住民の依頼に応じ、超宗派の僧侶による法話を積極的に実施している同会は、令和3（2021）年から年4回、亀山市内で場所を定めた講演活動も始めた。メンバーが順番に法話をし、その後は参加者のさまざまな質問に参加した複数のメンバーが応じる形式である。筆者が参加したときも、仏教へ関心を持つ参加者から行事や法要の意味などの質問がいくつも発せられていた。

以上の活動を概観すると、檀信徒への対応は基本だが、それ以外の人びとに向けて、所属寺院や仏教そのものの魅力を発信しようとしている試みが、対面だけでなく、オンラインを通じてなされていることがわかるだろう。

他の青年宗教者を含め、寺院Webサイトや寺院・個人のSNSなどを活用し、寺

院行事の予告・報告をしている者は少なくない。インターネットラジオやYouTubeを通じた法話の音声・動画配信もすっかり定着してきた。

檀信徒は葬儀・法要、あるいは寺院の行事に関心を持っている。非檀信徒で仏教一般や宗派・始祖の教え、あるいは仏像や仏教建築、仏教文化などに関心を寄せる人々も決して少なくない。このような状況下、自らの作務や家族・関係者の日常生活の紹介、境内で咲く草花や小動物などの様子を、広く発信している宗教者が多數いることは改めて確認しておきたい。このような外部発信は、必ずしも檀家や信者に向けたものとは限らない。むしろ、世間一般へ向けた発信が可能になり、それまで寺院に行くこと自体にハードルを感じていた人がこのような発信に応じて寺院へ出向いている実態が見られている。

図2は拙稿での引用を若干修正したものである。これまでの教化活動は基本的に檀信徒のことを考えればよいとされていた(上部)。しかし、非檀信徒であっても、信仰熱心な人はいるわけで(中下部)、その人々へSNSなどオンラインの活用により、教えがそれらの人々に届けられるというメリットは大いに役立てられるといえよう。

おわりに—ともに歩む未来へ—

筆者は約10年前に「ソーシャルキャピタル（社会関係資本。人と人のつながりや信頼などを資本として考える見方）」を中心テーマとした論集を編んだ。共編者櫻井義秀氏とともに、「市井の寺院や檀家が、人口減少に代表される地域の衰退と伝統的な葬送意識・儀礼の衰退、そして寺院の世襲による護持の困難という3つの事態をどのように受け止め、これからどのようにし

て20年後、30年後も寺院仏教を維持していくかを展望する」という観点で考察した⁵⁾。同書ではいくつかの宗派の事例も紹介し、地域に根差した活動をしている寺院を描いた。まさに、ソーシャルキャピタルとして寺院が機能していることを実感した。

他方、社会学者のオルデンバーグなどは、ファーストプレイスたる家庭、セカンドプレイスたる職場に対し、「インフォーマルな公共生活の中核的環境」というサードプレイス（カフェ、本屋など仲間とともにくつろげる「場」）という概念を用いて、宗教集団の機能も論じた⁶⁾。たしかに上記で紹介して来た教会や寺院などは、サードプレイスとして機能しているといえよう。そしてそれが、ウィズコロナの時代、どのように変化していくのか注目していきたい。

現在活躍している青年宗教者たちは、生まれたときからインターネットが普及しているデジタルネイティブ前後の世代である。今後はもっと若いZ世代が登場するだろう。

日本の人口ボリュームがもっともあった団塊の世代は日本社会を大きく変えた。人口割合は決して高くなくても、若い世代がそれぞれの寺院等で大きな役割を今後果たしていくだろう。ICTを使いこなせない高齢世代も、まだまだそれぞれの所属寺院等を支えていくだろう。筆者は、超世代が共に歩む未来へ向けて、その準備はハイブリッドの教化活動によって、すでにできていると感じている。

脚注

- 1) 川又俊則、2021、人口減少でも可能な「次世代教化システム」への志向、年報、24、30-33
- 2) 本稿はJSPS科研費21H00475助成を受けた研究成果の一つである。調査に協力してくださった青年宗教者の皆様に、記して謝したい。
- 3) 公益財団法人日本宗教連盟、2022、宗教界における新型コロナ感染症対策と提言、宗務時報、125、2-15、および、同、2023、新型コロナ感染症による社会生活の変化と宗教法人の活動、宗務時報、126、30-49
- 4) 川又俊則、2022、仏教教団が実践する教化活動の脆弱性と強靭性、東洋学研究、59、267-281
- 5) 櫻井義秀・川又俊則編、2016、人口減少社会と宗教、法藏館、6
- 6) R.オルデンバーグ、2013 (1989)、サードプレイス、みすず書房

4 真言宗智山派における青少幼年教化活動

智山教化センター 所員 池田裕憲

はじめに

「物の興廢は必ず人に由る。人の昇沈は定んで道に在り」。お大師さまが、民衆へ広く教育を施さんと綜芸種智院を創設するため上表された『綜芸種智院式』の中にある有名な一節である。

「三つ子の魂百まで」という言葉があるように、幼い頃の経験や体験はその後の人格形成に関わる影響が大きいとされている。子供たちが人生を歩む道のりで、仏さまの教えは一つの指針となり、成長していくうえで記憶の中の仏さまは心の支えとなるだろう。

このレポートでは、青少幼年の情操教育として宗教心を育むことを目的とした、本宗の青少幼年教化について、その活動を整理し、報告する。

1. 本宗における青少幼年教化活動の起りと展開

現在、「推奨する教化活動」のひとつとして数えられている「青少幼年教化」。その発端は平成14（2002）年開催の第92次定期教区代表会において「宗団の教化推進施策」に加えられたことによる。その背景には青少年問題（非行や犯罪）や寺院による次世代教化への課題が挙げられていた（詳細は『教化センター年報』7号（平成15年）を参照されたい）。

平成14（2002）年は少年犯罪検挙率が増加傾向にあり、全人口に対する年少率（14歳以下）と高齢化率（65歳以上）の割合が逆転し、差が広まり始めた時期でも

あった（図表1、2参照 出典 図表1：厚生労働省「令和4年版厚生労働白書」 図表2：法務省「令和4年版犯罪白書」）。また、時を同じくして「青少年育成施策大綱」が平成15年12月、政府により制定された。社会的にも青少年の育成に対して関心が高まっていたといえるだろう。

青少幼年教化活動を推進するにあたり、その実践者・指導者を養成していくため、

1. 理念の確立

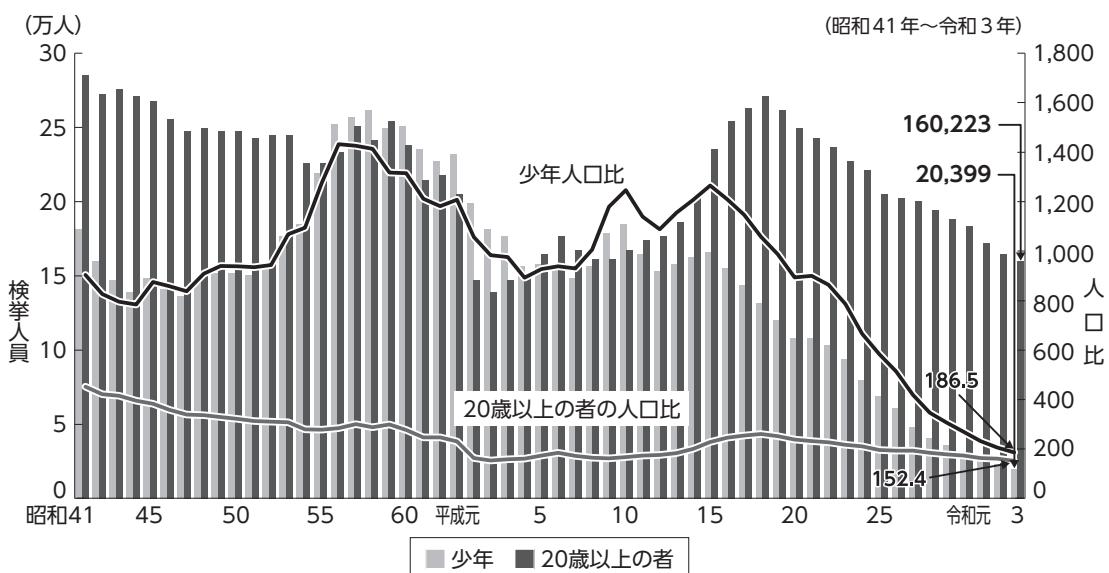
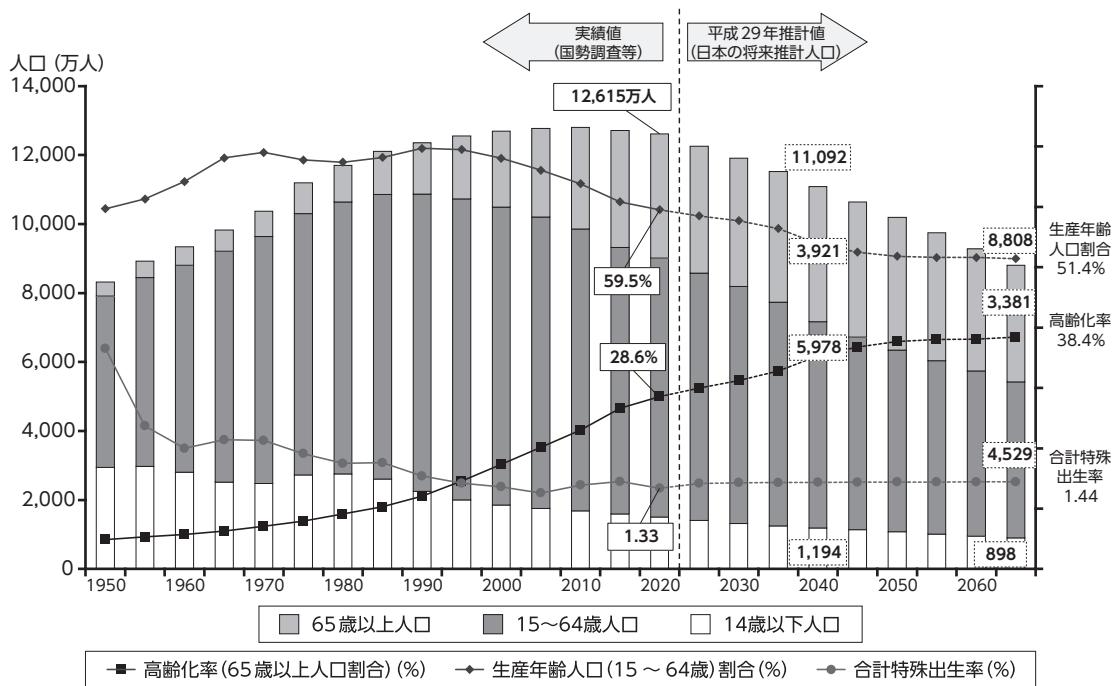
2. 具体的な目標の設定（モデルとなる活動の提案）

3. 指導者の研修・研究・情報交換の場面設定

4. 教材や実践プログラムの開発

以上4点を継続して提案することにより、体制の確立を目指した。まずは現状を把握するため教化モニターを利用した活動調査を行い、教化センター内での研究会や、教師・寺庭・寺族に向けた研修会も開催されるようになった。また、子供向けの教化資材が用意されていなかったため、リーフレットの作成も進められた。青少幼年教化推進の旗印として、寺子屋活動に焦点を当て、宗内寺院に開催を呼びかけ、実践者の増加に力を入れた。そして教化センター内では、寺子屋活動の核となる理念と方法論を確立するため「青少幼年教化研究会」を立ち上げ隨時開催し、その分野の研究者や有識者を招き見識を深めた。

理念については斎藤昭俊師（大正大学名誉教授・日本佛教教育学会名誉会長・全国青少年教化協議会代表理事）に多くのご示唆をいただき、宗教的情操心を「仏さま=大いなるいのち」との出会いで生まれる善

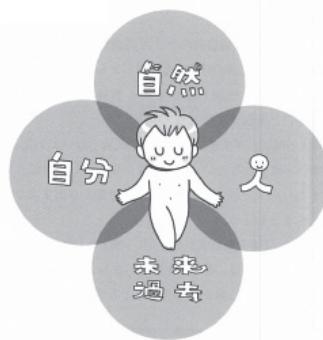




「ありがとう」「すみません」「いただきます」「おかげさま」「もったいない」など。

図表3 「宗教的情操心を育む基本理念を表した図」(出典:『寺子屋開設ハンドブック』)

- 1. 自然とのかかわり**
- 2. 人(親、仲間)とのかかわり**
- 3. 自分とのかかわり**
(自分自身をみつめる機会をつくり、自分を大切にする気持ちを養います。)
- 4. 過去・未来とのかかわり**
(過去と未来をみつめる機会をつくり、過去から今を生きるための智慧、未来に伝える智慧を学びます。)



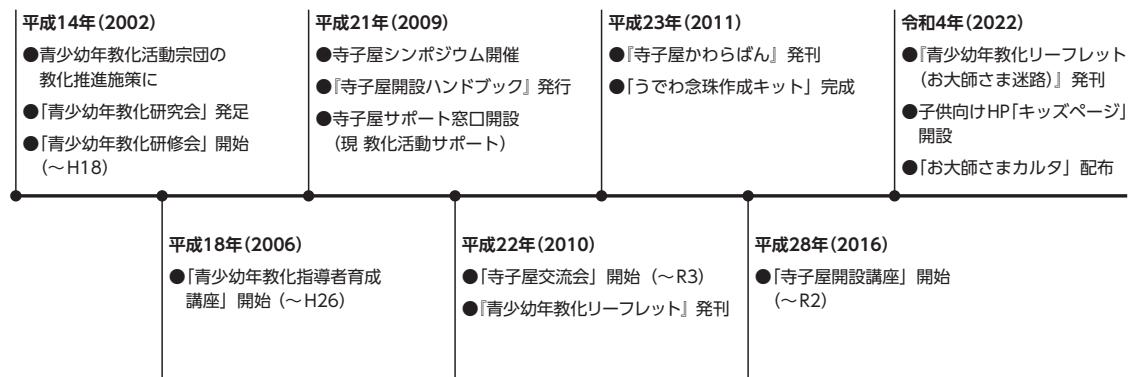
図表4 「寺子屋プログラムづくりにおける基本理念「4つのかかわり」」(出典:『寺子屋開設ハンドブック』)

提心を核とした「帰依・感謝・懺悔・慈悲」の心と定め、日常的な展開として「ありがとう、いただきます、すみません」などの気持ちが表れてくるものとした(図表3参照)。

方法論については、当時の教化センター専門員であった佐藤雅晴師による「宗教的情操心の涵養は言葉だけで伝えるものではなく、共有体験をとおして感じ取っていくもの」との提言から、4つのかかわり(図表4参照)をとおして、宗教的情操心を育むための「寺院独自のかかわりづくり」を築くプログラムを開発していくこととした。展開やそれぞれの内容は(図表5)のとおりである。

2. 現在の取り組み

このように推し進められ、活動の周知や指導者の育成・交流、実践への促しを続けていた本宗の青少年教化であるが、時代は令和へと移り、ほどなくして新型コロナウイルス感染症の脅威が国内に蔓延する。令和2(2020)年4月に初めての緊急事態宣言が発出されて以降は、人を集めての研修会は軒並み中止または延期された。その年の寺子屋関連研修会(「寺子屋開設講座」を開催予定であった)も例に漏れず中止を余儀なくされた。その間は主に『寺子屋かわらばん』にて、オンラインを利用



名称	実施期間	開催頻度	概要
青少幼年教化研究会	H14年～現在	年数回	青少幼年教化に関わる全般を検討・研究し、実践に移すための内部会議。
青少幼年教化研修会	H14年～H17年	年1回	青少幼年教化活動を周知・提案し、実践へと促すための研修会。
青少幼年教化指導者育成講座	H18年～H26年 ※H21年～隔年1回	年1回	青少幼年教化の指導者養成を目的とし、総本山智積院にて2泊3日、2年間のカリキュラムで知識や実践方法を学ぶ講座。
寺子屋開設講座	H28年～R2年	隔年1回	寺子屋未開催者を対象に、模擬寺子屋を体験し寺子屋開設のために必要なノウハウを学ぶための講座。
寺子屋交流会	H22年～R3年	隔年1回	すでに寺子屋を行っている方を対象に、プログラムの充実や情報交換などの交流を目的とした会。

図表5 「本宗の青少幼年教化への取り組み」

した寺子屋や、密を避けるために屋外で開催された寺子屋の活動事例を掲載し、宗内に発信・共有した。また、同年10月には「コロナ禍における青少幼年教化活動アンケート」を実施し現状把握に努めた。このアンケートの結果は『寺子屋かわらばん Vol.11』（令和3年3月発行）にて報告している。

翌令和3（2021）年には、前出のアンケート結果を受け、オンライン併用での「寺子屋交流会」を開催した。オンラインを利用した研修会は智山教化センターでは初めての試みであったため、その後のオンライン併用研修会への布石ともなるものだった。

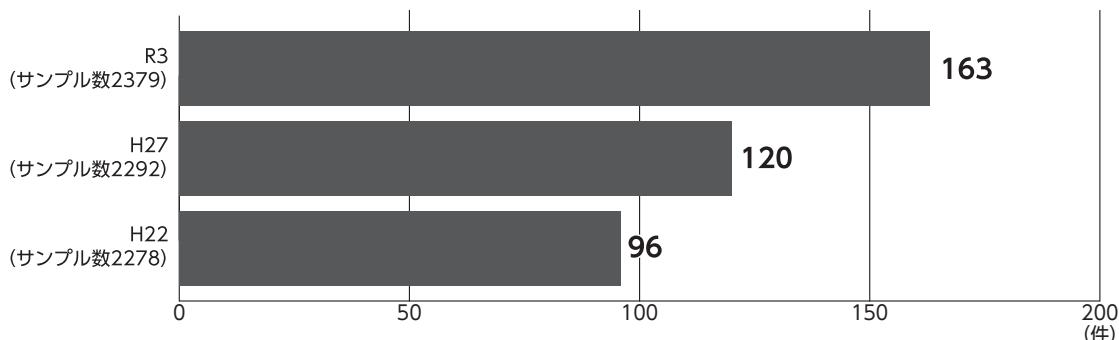
その後の研修会の形として、隔年で開催されていた「寺子屋開設講座」と「寺子屋交流会」は、令和4（2022）年に「寺子屋

勉強会」とその姿を変えた。寺子屋実践者が一定の水準に達したため、すでに活動を行っている方と、これから活動を行おうと考えている未経験者の交流の場を創出しようという思いがその背景にあった。

また、宗祖弘法大師ご誕生1250年の慶讃事業の一環として青少幼年教化資材も作成され、「青少幼年教化リーフレット（お大師さま迷路）」「お大師さまカルタ」が配布されたことは記憶に新しい。

「寺子屋勉強会」内のワークショップでは、この「青少幼年教化リーフレット」の活用方法が紹介された。また、今後は令和5年度開催の同勉強会にて「お大師さまカルタ」実践方法の提案や、その活用を目指した教区教化研究会も予定されている。

本宗において寺子屋を含む青少幼年教化



図表6「本宗における青少幼年教化実践寺院数」

出典：平成22年、平成27年、令和3年実施真言宗智山派総合調査

※R3年の数値は「青少幼年教化を行っている」「寺子屋活動を行っている」回答の合計数

を行っている寺院はまだ少数ではあるが、各種資料の提供や研修会などが功を奏してか、わずかではあるがその実践数が増加していることが総合調査の結果からみてとれる（図表6参照）。

今後も、寺子屋で子供たちが楽しめるプログラムの提案や、総本山智積院HP内の子供向けコンテンツの充実を目指し、検討・発信を続けていく予定である。

3、青少幼年教化の必要性とは

前節では主に寺子屋活動について触れてきたが、そもそも青少幼年教化というものは寺子屋活動に限ったものではない。阿字観や写経・写仏、その他教化活動、また、法事などでお寺を訪れた子供たちへ仏教についての法話や説明をしたり、リーフレットを配布したりすることも青少幼年教化であり、その根幹は大人たちへの教化と異なるものではない。

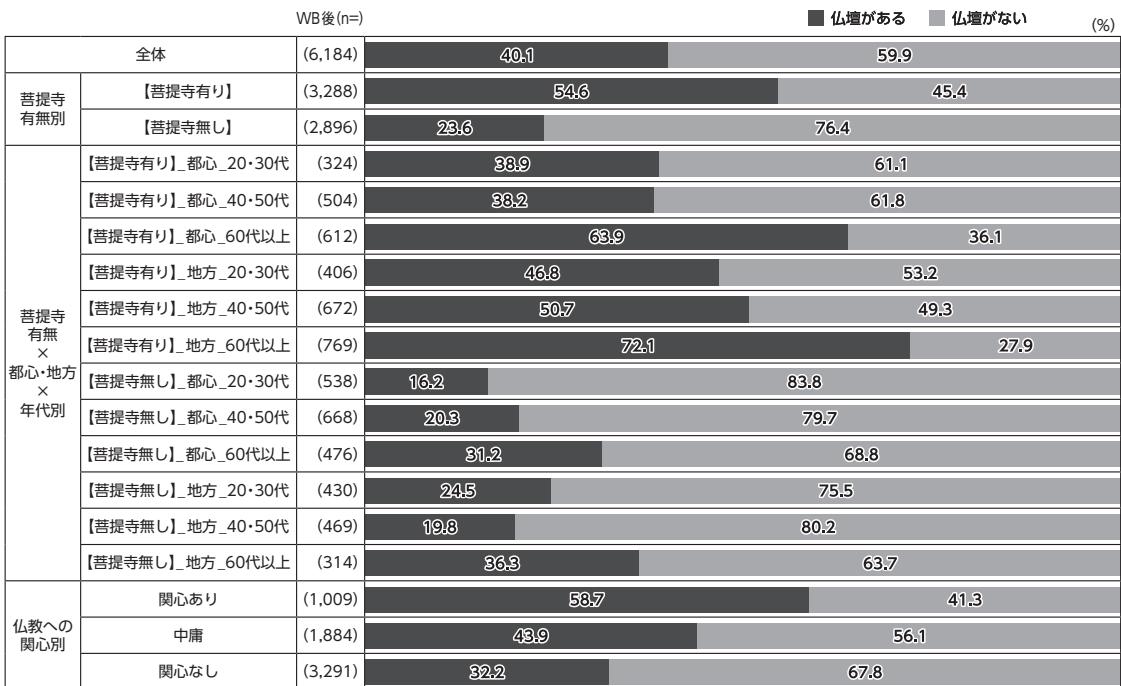
ではなぜ“青少幼年”と世代を区切って強調するのだろうか。大きな理由として、都市部への移住から始まる核家族の増加により、家庭内世代間での伝統文化や宗教儀

礼・信仰が子供たちへ伝承されづらくなつたことがある。加えて、調査によると家庭内における信仰の場として中心的存在を果たす仏壇の保有率は、全体でみるとおよそ4割ほどであり、都心部若年層は地方高年層より低い保有率であるという結果が出ている【図表7参照 出典：全日本佛教会仏教に関する実態把握調査（2022年）】。

つまりこれから生まれてくる子を含め現代の子供たちは仏壇のない家で育つことが多く、故に仏さまやご先祖さまに手を合わせるという習慣は身につきにくい。我々寺院側からアクションを起こさなければ、子供たちと仏さまとの距離が近づくことが難しいのは明白だろう。

加えて、家族で寺子屋に参加するという例も多く、子供を通じて保護者世代の教化につながるということも見逃せないポイントの一つである。このように、子供と大人が一緒に学ぶ、という機会も設けられるべきである。

仏さまやご先祖さまとの関わりが希薄なまま成長し、いずれ檀信徒の中心世代となつたとき、仏教、寺院活動への興味はいかほどであろうか。



図表7「仏壇保有状況」※必要箇所のみ切取処理

おわりに

ここまで、本宗における青少幼年教化活動の概要と、その必要性について記してきた。私が申すまでもなく、皆さまはすでに将来の信仰継承について危機感を強くお持ちであろうことも承知している。

過疎地域で周辺には子供がいない、活動に割ける時間や基盤もない、これもまた事実である。実際に、私の自坊の周りを見渡しても、子供は両手で数え切れるほどしかいない。しかしそのような環境でも、法事などで子供が寺院に訪れる機会は少なくない。先に述べたとおり、リーフレットを配布し、子供たちが仏さまの教えに触れるきっかけをつくることも立派な教化である。一つひとつのご縁を無駄にしないために、準備を整えておきたい。

冒頭で引用した『綜芸種智院式』の一節の続きに「大廈は群材の支持する所、元首は股肱の抜け保つ所なり。然れば則ち類多き者は竭き難く、偶寡なき者は傾き易し、自然の理然らしむ。」とある。お大師さまの言葉のとおり、志を同一に持つ仲間が増えれば、その活動も勢いを増し、充実していくはずである。

将来の信仰を担う青少幼年への教化活動は、宗団のみならず、本宗の寺院・教会にとっても、未来に希望を見出すため必要不可欠だといえるのではないだろうか。しかしそれ以上に、仏さまの教えによって子供たちの心が少しでも安らかであるようにと願う気持ちが、青少幼年教化という形に顯れると、私は思う。

現在利用可能な青少幼年教化資材

名称	内容	入手先（価格）	備考
ちさん腕輪念珠キット	1人分にパッケージングされた念珠づくりキット	真言宗智山派 宗務出張所出版係 （¥300）	「弘法大師」・「不動明王」・「大日如来」・「釈迦如来」の4種類あり
阿字の子リーフレット Vol. 1～5	仏さまの教えを子供向けに易しい言葉で伝えるリーフレット	智山教化センター（無料）	智山派寺院専用ページ内「青少幼年教化資材」にて無償ダウンロード可能
宗祖弘法大師ご誕生1250年慶讃事業 青少幼年教化リーフレット	弘法大師の生涯をクイズや迷路で子供にわかりやすく伝えるリーフレット	智山教化センター（無料）	真言宗智山派キッズページと連動
寺子屋開設ハンドブック	寺子屋を開催するための〈企画・構成・プログラム例・開催事例・安全対策・広報〉などが学べる冊子	智山教化センター（無料）	智山派寺院専用ページ内「青少幼年教化資材」にて無償ダウンロード可能
寺子屋プログラムシート	寺子屋で活用できるプログラムの手順や準備物をまとめたもの（例：蓮灯ろうづくり、新聞仏づくりなど）	智山派寺院専用ページ	智山派寺院専用ページ内「青少幼年教化資材」にて無償ダウンロード可能
やさしい写仏	子供でも行えるよう複雑で無い線で描ける写仏手本	智山派寺院専用ページ	智山派寺院専用ページ内「写仏手本」にて無償ダウンロード可能

入手・問合せ先

真言宗智山派 宗務出張所出版係	TEL 03-3431-7828 FAX 03-3431-0203	電話受付時間 9:30～17:00 土・日・祝日を除く
智山教化センター	TEL 03-3431-5218 FAX 03-3431-5219 e-mail kyoukac@chisan-ha.org	電話受付時間 9:30～17:00 土・日・祝日を除く
智山派寺院 専用ページ	総本山智積院→智山派寺院専用ページ→教化資材の無償ダウンロード一覧→ その他の教化資材「青少幼年教化資材」「写仏手本」 ※智山派寺院専用ページにログインするにはユーザー名／パスワードが必要です ご不明の際は 教化部時局対策課（075-541-5361 代表）までお問い合わせください	

IV その他

IV
その他

1. 購入図書

【一般図書・雑誌・新聞】

書籍名	編集者名	発行所
親子は生きづらい “トランスジェンダー”を巡る家族の物語	勝又栄政、他3名	金剛出版
宗教の凋落？	ロナルド・イングルハート	勁草書房
【第4巻】中野東禅選集【仏教の教化論-1】	中野東禅	同朋舎新社
【第5巻】中野東禅選集【仏教の教化論-2】	中野東禅	同朋舎新社
無縁社会の葬儀と墓：支社との過去・現在・未来	山田慎也、土居浩 編	吉川弘文館

書名						
月刊住職	高野山寺報	中外日報	地域人	文化時報	仏教タイムス	六大新報

2. 宗贈図書・資料　宗内寺院・教会刊行物

【宗内寺院・教会定期刊行物】

刊行物	寄贈者名	備考
岩槻大師	彌勒密寺	埼玉第4教区 寺籍1番
岩手教区だより	岩手教区宗務所	岩手教区
お大師さまとともに	大本山 川崎大師平間寺	神奈川教区 寺籍1番
川崎大師だより	大本山 川崎大師平間寺	神奈川教区 寺籍1番
桔梗通信	興性寺	岩手教区 寺籍31番
くすのかおり	東漸寺	九州教区 寺籍21番
虚空	東覺寺	東京東部教区 寺籍28番

刊行物	寄贈者名	備考
千の手	寂光院	東海教区 寺籍35番
高尾山報	大本山 高尾山薬王院	東京多摩教区 寺籍1番
高幡不動尊	別格本山 高幡山金剛寺	東京多摩教区 寺籍2番
智光	大本山 成田山新勝寺	下総印旛教区 寺籍1番
成田山法光	成田山大阪別院 明王院	京阪教区 寺籍39番
微咲	興性寺	岩手教区 布教師会発行
宝蓮寺通信	寶蓮寺	栃木南部教区 寺籍26番

【宗内寺院・教会刊行物(含、宗内寺院関係寄贈分)】

刊行物	発行所	寄贈者名
紀要 第7号	川崎大師教学研究所	川崎大師教学研究所
しろくまがきたぞ!	仏教伝道協会	仏教伝道協会
智泉	栃木智山青年会	高野山大学 密教文化研究所
梵字般若心経 聖なる文字で般若心経を写経する	リンクエージワークス	小峰智行
遊戯三昧 金剛山延命院第16世住職 渡邊照敬追悼集	延命院	長澤弘隆
六波羅蜜シリーズ 忍辱 眞実を受け入れる	仏教伝道協会	仏教伝道協会

【他宗派定期刊行物】

刊行物	寄贈者名	刊行物	寄贈者名
あんじやり	親鸞仏教センター	ちくまん	大本山大覺寺
池上	池上本門寺	花園	妙心寺派教化センター
おかげさま	妙心寺派教化センター	へんじょう	総本山善通寺
正法輪	妙心寺派教化センター	法華コモンズ通信	法華コモンズ仏教学林
親鸞仏教センター通信	親鸞仏教センター		

【他宗派刊行物】

刊行物	発行所	寄贈者名
現代と親鸞 第46号、第47号	親鸞仏教センター	親鸞仏教センター
仁和伝法所所報 第2号	総本山仁和寺 仁和伝法所	総本山仁和寺 仁和伝法所
みちしるべ「えん」縁	公益財団法人 仏教伝道協会	公益財団法人 仏教伝道協会

【関係機関・団体定期刊行物】

刊行物	寄贈者名	刊行物	寄贈者名
ケ・セラ・セラ	オトワレストラン	ぴっぱら	全国青少年教化協議会
全仏	全日本仏教会	りす俱楽部	りす俱楽部事務局

【大学・関係機関・関係者】

刊行物	発行所	寄贈者名
死生学・応用倫理研究 第27号、第28号	東京大学大学院 人文社会系研究科	死生学・応用倫理センター
宗教法制研究所紀要 第61号 法と宗教をめぐる現代的諸問題(十四)	愛知学院大学 宗教法制研究所	愛知学院大学 宗教法制研究所
日本文化研究 第15号	駒沢女子大学 日本文化研究所	駒沢女子大学 日本文化研究所
『弁顕密二經論』の研究	高野山大学 密教文化研究所	高野山大学 密教文化研究所
密教文化研究所紀要 第35号	高野山大学 密教文化研究所	高野山大学 密教文化研究所

(敬称略)

智山教化センターの役割と活動

智山教化センターは、真言宗智山派教化規程第二条「本宗の教化活動を効果あらしめるために、智山教化センターを設置する」の規定に基づき、真言宗智山派の教化を推進し、実動させるサポート機関です。

主な活動としては、

- ①教化推進施策として真言宗智山派が掲げる「教化目標（わたしたちの目標）」の策定。
- ②真言宗智山派で主催するさまざまな研修会の企画・立案と運営協力。また、教区で主催する「教区教化研究会」「檀信徒教化推進会議」などの開催協力。
- ③教師・寺庭婦人を対象とした教化情報誌の企画・編集。檀信徒に真言宗智山派の教えや「教化目標（わたしたちの目標）」などを知っていただくための教化誌の企画・編集。
- ④宗教文化全般、宗内寺院や他宗派の教化活動に関する情報収集や調査研究。などを行っています。

智山教化センター構成員(令和4年4月～令和5年3月)

役職名	氏名	就任年月日	所属寺院・団体	
センター長	鈴木 芳謙	R2.3.28	東京東部	香華院
所 員	倉松 隆嗣	H21.4.1	栃木南部	観照院
	上村 正健	H27.4.1	埼玉第四	西光寺
	伊藤 尚徳	H27.4.1	安房第一	極楽寺
	中嶋 亮順	H29.4.1	埼玉第十二	正法寺中
	池田 裕憲	H31.4.1	安房第二	圓光寺
非常勤所員	島 玄隆	H29.6.1	東京多摩	金剛寺中
	金剛 洋輝	R2.4.1 ^{*1}	埼玉第二	寶幢寺中
	平野 隆光	R4.4.1	上総第一	華藏院
専 門 員	高橋 一晃	H31.4.1	埼玉第一	東養寺
	高岡 邦祐	H29.4.1	埼玉第五	寶性院
	石川 照貴	H31.4.1	埼玉第六	萬福寺
	平川 真海	R3.4.1	埼玉第八	観音寺中
	吉田 住心	H24.9.1	埼玉第九	地藏院
	小杉 秀文	H31.4.1	上総第四	勝覺寺
	川又 俊則	H31.4.1		鈴鹿大学
主 事	萩原 輝浩	H27.4.1	埼玉第七	大光院
書 記	大槻 良栄	H27.4.1	上総第三	金剛寺
	大場 久和	R4.4.1 ^{*2}	埼玉第七	醫王寺
	保田 研心	R3.4.1	上総第四	蓮福寺中

※1 令和4年5月31日退任 ※2 令和4年9月1日異動

年報 第26号

(令和4年度号)

令和5年8月1日 発行

発行人 真言宗智山派宗務総長 芙蓉良英

編 集 智山教化センター

発行所 〒605-0951

京都市東山区東大路通り七条下ル東瓦町964

総本山智積院内 真言宗智山派宗務庁

電話 075-541-5361(代表)

FAX 075-541-5364

印刷所 株式会社ディー・エイ・ティ・コーポレーション